

2004年度
キリスト教活動ハンドブック

明治学院大学宗教部

新入生の皆さんへ

学長 大塩 武

すでにご経験なされたように、明治学院大学の入学式はチャペルにおけるキリスト教の礼拝形式によっておこなわれます(卒業式も同様です)。厳粛な空気のなかにも穏やかな包容力を感じ取っていただけたはずです。

私達の大学の基本的なあり方を定めているのはキリスト教です。明治学院大学の歴史的起源は、今から145年前の幕末の日本に伝道活動のために来日したヘボン(Hepburn)博士が創設したヘボン塾に遡ることを考えたとき、その経緯は容易に理解できます。

明治学院大学の教育の理念は、「基督(キリスト)教に基づく人格教育を基礎として、広く教養を培うとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的応用力を発揮させること」(明治学院大学学則第一条)にあります。「基督(キリスト)教に基づく人格教育」とは、社会に奉仕し、人を愛し、そして真実の前に謙虚な人間を育てるということです。この教育理念を実現するための大学の活動の一端が、宗教部によって担われています。この「キリスト教活動ハンドブック」を手がかりに、本学の教育理念について更に一層理解を深めていただければ幸いです。

明治学院大学のキリスト教精神

副学長 鵜殿 博喜

例外はあるでしょうが、私学は、一般的には、志のある人(たち)が教育の理想を抱いて建て上げた学校です。そのような数ある私学のなかで、明治学院大学は建学の精神をキリスト教に抱いています。キリスト教とただただでは漠然としていて、意味がよくわからないかもしれません。明治学院のキリスト教は、幕末にはるばる太平洋を渡って来日したヘボンとその他の宣教師たちのクリスチャンスピリットであるといっただけではよいでしょう。ヘボンが医療活動しながらキリスト教を伝えたということは、21世紀のこんにちに生きる私たちにもいろいろなことを示唆してくれています。人間の魂の救済(信仰)と肉体の癒し(世俗の活動)は決して矛盾するものではなく、キリスト教は魂と肉体の両方を含んだ全人格的宗教だということを、ヘボンたちは教えてくれました。それはまたフロンティアスピリットでもあります。明治学院百数十年の歴史は、社会で活躍する多くの人びとを輩出したという意味で、フロンティアの歴史と言えます。

明治学院大学は、学生の皆さんにキリスト教の信仰を押しつけるようなことはいっさいいたしません。ただキリスト教とはどういう宗教なのか学んでほしいとは思っています。そこで、必修科目として「キリスト教の基礎」という科目を設けています。これは明治学院がその存在を証明するための中核的科目です。時代が進み、科学が進歩すれば宗教はなくなると思う人がいるとすれば、それはとんでもない誤解です。現代の世界を見れば、宗教がどんなに重要かわかりますし、宗教の理解なくして世界の人びととの相互理解はむずかしいということも、現代においてますます明らかになってきました。明治学院大学に入られたみなさんには、長い歴史と建学の精神から生まれた伸びやかでリベラルな雰囲気の中、存分に学び、存分に活動して下さることを願っております。

わたしの大学生活と宗教部

宗教部長・文学部教授 水落 健治

すでに数十年前のことになるのですが、私が初めてキリスト教主義の大学に入学して驚いたことがふたつありました。そのひとつは、入学式がキリスト教の形式で行われ、聖書や讃美歌や祈祷が式の中に入っていたこと、そしてもうひとつは、「宗教部」なるものが大学の中に《堂々と》存在していて、何やら不可解な活動を色々やっていて、そこに出入りしている学生が結構いるらしい、ということでした。

小学校から公立学校に通い、高校も「東大への進学者何人」ということのみを気にする都立高校に学んだ私にとっては、大学に「宗教」などというものが紛れ込んでくること自体《うさん臭いもの》でした。そもそも大学とは、客観的な真理探求の場であるはずなのに、そこに「思い込みの局地」である宗教などというものが存在していること自体、何か《いかがわしい》ことだったのです。

けれども、私のそのような思いは、大学での勉強が進むにつれて少しずつ変わって行きました。およそ学問には、人文科学、社会科学、自然科学があり、その中で特に人文科学と呼ばれる学問が「生きる」ことに関わるということ、すなわち、世界の根源やわれわれの知識のなりたちを扱う哲学、人と人との関係や価値の問題を論ずる倫理学、美しいものに出会った時にわれわれが感ずる感動に関わる芸術学、過去の人間の生を再現しようとする歴史学、ことばを通して様々な人物像や美の世界を提示してくれる文学などが、直接・間接に「生きる」ことに関わるということが、大学での生活を通して分かって来たからです。加えて、社会科学と呼ばれる政治学や社会学が、「これまでの人間の歴史がどれほど宗教に関わり影響されてきたか」を教えてくれたことも、私の考えが変わるきっかけとなりました。

そんな具合で、私の大学生活は、結構まじめなものだったのですが、今その頃のことを思い起こしてみると、どうしても忘れることができないひとつの経験があります。それは、そんな意識の中で大学四年生の時に参加したワークキャンプの生活です。

そのキャンプは大学宗教部の後援で行われた、ある知恵遅れの人々の施設でのキャンプでした。施設には、幼い子供たちのみならず、五十歳位で知能は五歳程度という成人も多く生活しており、私たち参加者は、四日程そこで生活しながら施設周辺の土木作業などをしました。

その最後の晩だったと思います。それまでの作業に疲れた私は気晴らしに当時レッスンを受けていたフルートを吹き始めました。すると、そこに生活している人々が次々と私の周りに集まって来たのです。そして一言も喋らずに私の演奏に聴き入り、一曲終わると「もっと吹いて」と頼んで来ました。そのリクエストがあまりに熱心だったので、私は演奏をやめるわけにもいかず、持って来た楽譜のなかで演奏できる曲をすべて吹きました。吹けるだけの曲を三十分程吹いて「もう弾ける曲はありません」と私が言うと、それまで一心に耳を傾けていたひとりの頭の禿げた五十歳位の方が、しばらくの沈黙の後、一緒に聴いていた職員の女性に向かって一言、「きれいだねえ」と語ったのです。

私はその心底純粋な言葉の響きにガーンと頭を殴られたような気がしました。その衝撃は、私がそれまで経験したり大学で勉強したりして培ってきた「人間」についての知識を根底から覆すに十分なものでした。「人間とは何か。人間はここまで純粹でありえるのか」この出来事が私に突きつけた問いでした。

現在、私は哲学の研究者としてヨーロッパ古代から中世の哲学を言語の問題を中心に研究しています。今改めて自分の歩みをふりかえってみると、大学四年の時に参加したこのワークキャンプで突きつけられた問いが、これまでの自分の研究生活の中に深く宿っている気がしてなりません。宗教部のワークキャンプで学んだことは、ある意味で、授業で学んだことよりも大きかったのです。

明治学院大学の宗教部も、このような新しい経験の契機となるようなプログラムを様々なに提供しています。私は皆さんがこれらを積極的に利用して新たな世界に旅立たれることを願ってやみません。これこそが、大学で学べる真の《知》だと思っています。

大学チャペルと宗教活動について

学院牧師 金井 創

新入生の皆さんが通学する横浜キャンパスには近代的で開放感あふれるチャペルが、そして白金キャンパスには歴史の重みを感じさせるチャペルがそれぞれ置かれています。これらチャペルは学業を中心とした学生生活との直接の関係はないように思われるかもしれませんが。しかし、キリスト教精神を土台とする人格教育を建学の精神とする明治学院大学において、チャペルはこの精神を目に見える形で表している象徴的な建造物でもあります。

ただチャペルも建物がそこにあるだけでは、その存在意義の半分しか満たすことができません。大いに活用されてこそ真価が発揮されるのです。ここでは授業期間中、毎日大学礼拝（チャペルアワー）が行なわれています。

チャペルアワーでは教職員、学院牧師、宣教師、学生などによるメッセージが語られるほか、音楽主任、学生団体による音楽礼拝など多様なスタイルの礼拝が行なわれています。

大学は決められたカリキュラムをこなすだけの学びではなく、自ら学ぶ機会、対象、テーマを探る場所です。そうした学びを通して自分なりの世界観、人生観、価値観そして真の教養を身につける場所でもあります。その目的のためにチャペルはさまざまなチャンスを提供しています。上記のチャペルアワーもその一つ。

日本では宗教というと敬遠されるか、毛嫌いすらされる傾向があります。ところが留学したり、ある程度長期間海外に滞在すると多くの人が「あなたの宗教は？」と問われた経験を持っています。世界の人々と出会っていくのに宗教的な素養は欠かせません。世界の多くの人々が自分の人生観と宗教を結びつけて生きているからです。

宗教に裏付けられた人生観とはどのようなものか。そんなことを考える上でもチャペルアワーでのメッセージは有益です。もちろん、チャペルだからといってキリスト教信仰を絶対のものとして押し付ける

ことはありません。一つの価値観と向き合い内的な対話をすることによって、自分の生き方を確立していく。そのような機会としてチャペルアワーを活用してください。

また、大学における宗教活動はチャペルアワーだけでなく、大学宗教部、学院宗教センターが協力してさまざまなプログラムが提供されています。読書会や聖書の学び、オルガン講座・音楽会・映画上映会やチャペルライブ、ワークキャンプなどのボランティア活動や「平和を考える旅」、キリスト教週間やクリスマス関連行事、文化的な催しとしては宣教師によるピース・カフェや、沖縄ピースカフェ「じんぶん倶楽部」など年間を通じて数多く用意されています。これらの行事の中には企画・実施を学生の皆さんと共に行なうものもいくつかあり、計画から積極的に参加していただくことによって新たな世界が開かれてゆくことでしょう。

宗教部事務室は横浜キャンパス、白金キャンパス両校地に置かれています。どうぞ気軽に立ち寄ってください。いろいろな情報が得られるだけでなく、皆さんのアイデアも活用させていただきます。そこから新しい活動が始まっていきます。スタッフ一同、どなたでも来て下さるのを楽しみにお待ちしております。

キリスト教活動案内

【宗教部】

宗教部は、明治学院大学のキリスト教活動全般を担当している大学の組織です。白金校舎は、チャペルの向かいの記念館という建物の1階に、横浜校舎は、チャペル脇の建物の中に事務室があります。事務室にいらっしゃるのはいつでも歓迎いたしますし、事務室の隣りには、それぞれ学生のキリスト教活動に使える集会室があります。

【宗教センター】

本学には学院全体のキリスト教活動にかかわる部門として、「明治学院宗教センター」が置かれています。中学校、白金高等学校、東村山高等学校、大学それぞれの宗教活動について連絡、協力する組織として1998年に発足しました。

【学院牧師】

明治学院ではキリスト教主義教育推進のため、またキリスト教諸活動を活性化するため1996年度より「学院牧師」の職が置かれています。学院牧師は他のキリスト教主義大学ではチャプレンとも呼ばれ、その働きは「本学院の勤務員、学生、生徒、卒業生及びその家族よりの求めに応じ、キリスト教による信仰指導」を行うと規定されていて、学院のキリスト教活動を行うと共に、学院関係者の信仰的、宗教的な相談を受けることも働きのひとつとしています。

また、横浜校舎のチャペルでは毎週日曜日、明治学院教会が礼拝を行っています。これは平日のチャペルアワーとはまた別の、地域教会としての礼拝です。学院牧師はこの明治学院教会にも責任を担っており、日曜日は教会の牧師として活動しています。明治学院教会には地域の方たちが集ってくるほか、本学の学生、卒業生も参加しており、子どもからお年寄りまで、礼拝と交わりを共にしています。

【大学礼拝 チャペルアワー】

本学では授業のある毎日（但し土曜日を除く）、チャペルで礼拝（チャペルアワー）を行っています。オルガンの前奏を聴き、讃美歌を歌い、聖書に基づくメッセージがあります。メッセージは、本学の教職員、近隣の教会牧師、オルガニスト、学生など、さまざまな分野の方々が担当します。人生の根源的なテーマについて共に考えたり、今社会で起きている問題などを取り上げたりします。チャペルアワーは誰でも出席できます。広く皆さんの出席を歓迎します。聖書と讃美歌はチャペルに用意してあります。

【白金チャペル】 12:35～13:00（月・火・木・金）

【白金チャペルノ夕拝】 17:30～18:00（水曜のみ）

【横浜チャペル】 12:40～13:00（月曜から金曜まで）

【特別礼拝】

特別礼拝は、イースターとクリスマス을祝して行われます。イースターは、キリストの復活を覚える日として、キリスト教会では盛大に祝われています。本学では新入生の歓迎を兼ねたイースター特別礼拝を行います。クリスマスは、明治学院のキリスト教活動では最大の行事で、多数の学生が出席しています。音楽系サークルも出演協力します。

新入生歓迎イースター特別礼拝

【白金チャペル】 4月14日（水） 17:30～18:00

【横浜チャペル】 4月15日（木） 13:40～13:30

クリスマス特別礼拝

【白金チャペル】 12月15日（水） 17:30～19:15

【横浜チャペル】 12月13日（月） 12:40～13:30

12月17日（金） 18:30～20:00

【キリスト教週間】

特定の期間をキリスト教週間として、その週の統一テーマのもとで、礼拝ほか講演や映画上映会など様々な行事を行っています。横浜校舎のキリスト教週間最終日は《戸塚まつり》の大学企画イベントとしても参加しています。2004年度のキリスト教週間は、横浜校舎が5月24日（月）～5月29日（土）、白金校舎は10月18日（月）～22日（金）の予定です。

す。詳細は、白金通信や学内の掲示、週報、ホームページ等で確認してください。

【読書会】

読書会は誰でも自由に入ることができる講座です。授業のある期間に設定されていますので、時間の都合のつく方は参加してください。

聖書研究+読書会「B+」

講師：永野茂洋 教養教育センター教授

日時：毎月1回 第4火曜日3限~4限(15:05~18:15)

4月27日スタート

場所：横浜校舎 宗教部集会室(横浜チャペル横の建物)

又は永野研究室(横浜校舎1号館4階1417号室)

聖書と聖書以外の本を少しずつ読んで、「こころ」と「脳ずい」と、ついでに「おなか」も満たそうという、「明るい読書人たち」の会です。

「B+」の+（プラス）には、聖書以外の諸々のことが全部入ります。今年は、キリスト教に関心のある者にとっても、別のものに関心がある者にとっても、学生時代には是非読んでおきたい、読んで必ずよかったと思える一冊として、内村鑑三の『後世への最大遺物』（岩波文庫）か、D・ボンヘッファーの『共に生きる生活』（森野善右衛門訳、新教出版社）を読みたいと思います。テキストはこちらで用意します。

最初の顔合わせを4月27日(火)3限目に永野研究室で行います。もしその日に都合がつかなかったり、もっと詳しい事が聞きたいという方は、永野研究室(1号館1417号室)若しくは宗教部までご連絡ください。

「読聴会」

『青春の蹉跎』から『アメリカの悲劇』へ...

講師：久山 道彦 文学部教授

日時：第2と第4の水曜日が原則です(6月は第3と第5です)

前期は、次の4回です。

5月12日(水)、26日(水) 6月16日(水)、30日(水)

後期は、次の6回を予定。10月13日(水)、27日(水)

11月10日(水)、24日(水) 12月8日(水)、22日(水)

時間は、7限終了後、午後9時20分から、一時間ほどです。

場所：白金キャンパス本館9階のキリスト教研究所

「読書会」というのは、何か不思議な言葉です。何故、皆で集まって本を読むのでしょうか。やりたいことが山ほどあり、ただでさえ時間が足りない私達が、自分一人で「読書」すればそれで済むとも思えるのに、いったい何故、わざわざ「会」を開いて偕に本を読むのでしょうか。二週間に一度、水曜日の授業後のひととき、同じ本を読み、友の想うことを聴き語らう場を持つようと考えました。夜の授業が終わって、9時20分から小一時間ほど、飲み物でも持ち寄って、お菓子でもつまみながら、友の言葉の中に、その表情の中に、一人で読む時には得られない「宝」を発見したいと思います。今年度は、「『青春の蹉跎』から『アメリカの悲劇』へ」と題して、春学期には、石川達三による『青春の蹉跎』を読み、萩原健一と桃井かおり主演の映画を鑑賞して、秋学期からは、その作品のもとになったドライバーの『アメリカの悲劇』と一緒に読破し、その映画化である『陽のあたる場所』を鑑賞したく思っています。どちらの作品も文庫版になっているので入手し易いでしょう。上昇志向の青年と恋愛、妊娠、そして破滅への道。これらの本の内容(日本の司法試験や死刑問題、アメリカの宗教観や司法制度などなど)に興味を持っておられる方、時々または偶然の飛び入り参加者も大歓迎です。無理をせず、大学生活の緊張からリラックスするつもりでどうぞ。

「我々は何を知ることができるか？」

カントの『純粋理性批判』を読む」

講師：寺田 俊郎 法学部助教授

日時：毎月第一水曜日

場所：横浜キャンパス(詳細は宗教部までお問合せください)

ドイツの哲学者、イマヌエル・カント(Immanuel Kant 1724-1804)が亡くなって今年でちょうど200年になる。そのカントの主著『純粋理性批判』をていねいに読みたい。これまでも世界中で読み継が

れ、いまでも読まれ続けている、哲学の古典中の古典である。はっきり言って難しい。おしゃれなエッセイで人気のあったカントは、『純粋理性批判』を書くに当たっては、なぜかそれまでの軽妙な文体を捨てて、まわりくどい難解な文体を用いた。なぜかよく分からないが、はっきり言えることは、カントが「人間とは何か？」という問いに答えようと格闘していたこと、そして、理性を「公的に」使おうとしていたことである。理性を「公的に」使う、とは、人が人である限り関心をもたずにはいられない問題について、一人の個人が他の人々に向かって自分の意見を率直に述べ、他の人々の意見も聴きながら共同で考える、ということである。そこで、我々も『純粋理性批判』と格闘しながら、「人間とは何か？」という問いを、理性を「公的に」使いつつ考えたい。

ENGLISH NEW TASTAMENT

講師：ODANI, Sean 講師（英語）

日時：4月20日 火曜日 15:15～16:15

場所：横浜宗教部集会室（横浜チャペル横の建物）

This Bible study will take a look at the English New Testament. We will look at the way the New Testament is organized. We will learn about the history of the New Testament plus the main points of each book.

「聖書を読む」

講師：大塩 光 蒲田新生教会牧師（本学卒業生）

日時：4月16日（金） スタート

毎週金曜日 14:45～15:45

場所：白金校舎 記念館1階 宗教部集会室

聖書というものに対して「難しい」「字が多い」「信じられない話ばかり」など色々な印象を持っていると思いますが、「取りあえずよんでみようよ」というのがこの会の目的です。必要な説明は付けますが、まず読んでみて感じたままのことを皆で語り合いたいと思います。今年は新約聖書のルカによる福音書を取り上げます。イエス・キリストが語るメッセージを皆で味わいましょう。また毎日行なわ

れているチャペルアワーにも皆で味わいましょう。また毎日行なわれているチャペルアワーにも是非積極的に参加してみてくださいね。きっと何か見つかりますよ。

心で味わう聖書

講師：深谷 美枝 社会学部助教授

日時：4月15日 スタート

第1・第3火・木曜日（読書会の日程は応相談） 16:30～18:00

場所：白金キャンパス ヘボン館10階深谷研究室

2003年度は、キリスト教とは縁もゆかりもない四年生と半年間聖書を読み、辛い時や落ち込んだ時に心を支えられたり、生き方を鋭く示されたりという経験を分かち合ってきました。クリスチャンになる気もないけれど、ちょっと心の支えが欲しい、キリスト教の学校に来たついでに聖書でもというあなた、お待ちしております。

【Peace Café】

誰でも歓迎、出入り自由の、とっておきのカフェです。手作りのお菓子を食べながらゲームをしたり、文化や習慣などいろいろなことについて話し合ったりしています。一人で参加してもすぐに打ち解けられるアットホームなプログラムです。試しに一度覗いてみて下さい。

担当:Christian Zebley 本学協力宣教師

<白金校舎>：毎週火曜日 14時～18時

場所：記念館1階集会室

<横浜校舎>：第2、第4木曜日 11時～14時

場所：宗教部集会室（横浜チャペル脇の建物）

白金校舎では4月13日から、横浜校舎では4月22日から開店。

【じんぶん倶楽部-沖縄ピースカフェ】

沖縄に関することなら何でも取り上げます。主にビデオを皆で観て語り合いたいと思っておりますが、とにかく少しでも興味のある人は気軽に集まってください。宗教部主催の夏の「沖縄から平和を考える旅」の学習会も兼ねていますし、沖縄のレア情報も満載ですので是非一度参加してみてください。

講師：金井創学院牧師・大塩光蒲田新生教会牧師（本学卒業生）

< 白金校舎 >

日時：毎月第 1、第 3 金曜日 16:25～17:55(5 限)

場所：宗教部事務室までお問い合わせ下さい。

< 横浜校舎 >

日時：毎月第 2、第 4 金曜日 17:00～18:15

場所：横浜宗教部集会室

白金校舎では 4 月 16 日から、横浜校舎では 4 月 23 日から開店。

なお第 5 金曜日はお休みです。

「沖縄から平和を考える旅」に関心のある方は是非出席してください。

【オルガン講座】

オルガン講座を 1 年半受講した学生は、正規授業カリキュラムの「明治学院科目」である「オルガン実習 1」「オルガン実習 2」の各 2 単位を履修することが可能です。その際には、あらかじめ担当者の履修許可をもらって登録してください。〔22 ページの「正規授業科目〔明治学院科目〕について」の「オルガン実習」の説明を参照。〕

両校舎のチャペルにはパイプオルガンがあり、毎日の礼拝や行事で演奏されていますが、聞くばかりでなく、弾いてみてパイプオルガンのすべてを体験しよう、という講座です。横浜・白金校舎それぞれのオルガニストがレッスンをを行っています。パイプオルガンへの興味は皆さままで、内側にもぐりこんで熱心に構造を調べる人、憧れのトッカータとフーガをめざして練習に励む人などいろいろです。キリスト教主義大学の特色あるプログラムのひとつとして、カリキュラムが組まれています。受講の成果を発表する機会も開催されています。白金・横浜校舎それぞれ以下の方法で受講者を募ります。

オルガン講座 2004 年度受講生募集要領

原則として鍵盤楽器経験者を対象とします。

< 横浜校舎の場合 >

講座履修登録 4 月 16 日（金）までに、所定の申込み用紙に記入し、横浜宗教部事務室に提出、オルガニストと個別に面接・相談してください。

希望者多数の場合は、オーディションを行います。

* 第 7 回オルガン講座発表会（横浜校舎オルガン講座 10 周年記念）

5 月 27 日（木）17:00～18:30（予定）

< 白金校舎の場合 >

4 月 12 日（月）までに、宗教部事務室に備え付けの所定の申し込み用紙に記入のうえ、提出して下さい。オーディションと面接を行います。

4 月 14 日（水）、15 日（木）、16 日（金）いずれも 14:00～16:00 の間で、都合のよい日時にチャペルに直接おいでください。

課題曲は 2 曲、讃美歌 312 番と J.S. パッサ 『インヴェンション』二声第 2 番八短調です。楽譜は宗教部に用意しています。

【学生宗教活動懇談会】

大学の宗教行事を積極的に支援している学生サークルがあります。新入生歓迎会、明治学院音楽祭、クリスマスツリー点灯式、クリスマス礼拝などの行事には宗教活動協力学生団体所属のサークルが出演し、イベントを盛り上げています。2004 年度現在の所属サークルは以下の通りです。

グリークラブ

吹奏楽部

チャペルクワイア

ヘボン聖書研究会

舞台技術研究会

グリーンリーヴズ

L.M.S（軽音楽サークル）

人形劇団 Z00

白金ウォーク

管弦楽団

白金ベルハーモニーリングーズ

クラシックギター研究会

アナウンス研究会

国際クリスチャン同好会

JAZZ 研究会

ゴスペルクワイア

ハピタット MGU

これらの学生団体のリーダーと宗教部とが 1 年に 1～2 度会合し、行事計画やサークル活動相談などを行っています。

【ペンテコステの集い】

ペンテコステとは、イースター、クリスマスにならぶキリスト教会の三大祝祭のひとつです。これは白金校舎周辺にある日本キリスト教団の

諸教会と共催で行なわれる集いです。近隣教会と学院が良い協力関係で結ばれるよう30年にわたって行われてきました。今年は第一部・礼拝、第二部・音楽の集いとして計画しており、特に第二部では諸教会の聖歌隊、あるいはバンドなどの出演を予定しています。学生のサークル等の参加も歓迎しますので、興味のある方はお問い合わせください。

今年は、5月30日(日)に行います。連絡は、白金宗教部事務室まで。

【演奏会】

現在は主に横浜チャペルで年に1~2回、秋にパイプオルガン・合唱をはじめいろいろなジャンルのコンサートを行っています。宗教音楽というと堅苦しいイメージですが、音楽はもともと宗教と深い関わりがあるものでした。演奏曲目の文化・社会背景・作曲者の生涯についての説明など、演奏者のトークもまじえての楽しいコンサートで、このシリーズを楽しみに足を運んでくださる学外からのお客様もいます。演奏会の詳細は学内に掲示してお知らせします。

【明治学院大学音楽祭】

毎年、白金祭の期間に音楽系サークルの大半が一堂に会して日頃の成果を発表するのが、この音楽祭です。

普段のチャペルでは宗教音楽が主に演奏されますが、チャペルは決してクリスチャンだけの特別な場所ではなく、誰でもいつでも気軽に入れます。あらゆるジャンルの音楽の祭典に、皆さんも聴衆、あるいはプレイヤーのひとりとして参加してください。

例年の参加サークルは、管弦楽団・吹奏楽部・グリークラブ・グリーンリーヴス・クラシックギター研究会・ベルハーモニーリンガーズ・マンドリンクラブ等です。

【ワークキャンプ】

国内・海外のワークキャンプを計画しています。

<アジア学院ワークキャンプ>

国内は、栃木県の西那須野にあるアジア学院にて、3泊4日の予定で行うプログラムです。アジア学院は、キリスト教を基にアジア・アフリカ諸国から農業、牧畜についての研修をするための留学生を受け入れて

いる学校ですが、日本の学生たちの農業・畜産の体験学習も受け入れています。2004年度もワークキャンプを実施します。家畜の世話や畑での作業、施設の修理など、日頃経験できないような作業ばかりですが、農作業初体験の方でも大丈夫です。働いて汗を流すことの気持ち良さ、空腹そして食事のありがたさなど、労働に限らないたくさんの経験が待っています。

2003年度は、明治学院東村山高校、白金高校、明治学院大学そして桜美林大学の学生と共にキャンプをしましたが、学年を超えた仲間を見つけることができたいい機会だったと思います。

一日は先ず、礼拝から始まります。その後、鶏や牛や豚にえさをあげたりなど家畜の世話ががあります。作業の中心は畑での農作業です。その他、食事作りやアジア学院の設備の手入れなどがあります。時には収穫物の加工など多岐にわたります。研修生(留学生)と一緒に農作業をしたり、交流の時も持ちます。このキャンプを通じて、いろいろな人と交わり、友人を作りましょう。そして、自分の新たな可能性を開きましょう。

今年のアジア学院の日程は、8月に実施の予定です。詳細は白金宗教部事務室にお問い合わせ下さい。

<海外ワークキャンプ>

2004年度生以降の学生は、海外ワークキャンプに参加する場合は、正規授業カリキュラムの「明治学院科目」である「ワークキャンプA」「ワークキャンプB」の計4単位を履修することになります。〔23ページの「正規授業科目〔明治学院科目〕について」の「ワークキャンプ」の説明を参照。〕

今年度の海外ワークキャンプは、昨年度と同様にフィリピンで行う予定です。キリスト教主義の国際NGOであるハビタット・フォー・ヒューマニティとの協力で、2週間で住宅建設とコミュニティサービスを行うプログラムを計画しています。一戸の家を完成させて、住人となる人に鍵を渡してキャンプを完了します。

4月から5月にかけて、ワークキャンプの説明会を白金・横浜両キャンパスで行います。その際に参加希望者の登録をし、6月から8月にかけて12回前後の事前研修会(合宿を含む)を開催します。そこでは、現地

の活動内容、安全や健康管理の方法、ハビタット・フォー・ヒューマニティについての知識、フィリピンの社会状況などの学習を含んだリーダーシップ研修を受けることとなります。また、1つのワークキャンプグループとして役割分担も決め、準備を進め、現地に向かいます。

現地では、朝から夕方まで建設現場での作業が続き、夜や週末は見学や娯楽で楽しみます。最終日には、献堂式の後、さよならパーティで幕となります。また、建設作業とは別に、現地のNGO/NPOと協力して、コミュニティ支援のための活動に参加し、個別の研究プロジェクトをします。宿泊は、ホテルなどの宿泊施設で、ホームステイもあります。

帰国後は、報告書の作成と報告会を実施し、それまでに経験したことを深め、客観化させ、多くの人々と共有させる試みをします。

2003年度の参加費は、14日間で13万円でした(交通費、宿泊費、食費、保険および建設費用を含む)。その他に、事前研修会の費用が1万円程度、予防接種の費用が2~3万円掛かっています。今年の海外ワークキャンプの日程は夏休みの期間に実施予定です。詳しくは白金宗教事務室に問い合わせして下さい

【平和を考える旅】

平和を考えるスタディーツアーです。2004度も前年度と同様、8月下旬に沖縄県を訪ね、戦跡や文化遺産などを見てまわる予定です。旅の参加条件としては、事前学習会になるべく出席し、沖縄の文化や歴史などに親しむことです。春学期には沖縄に関する学習会を開きますので、参加希望者はぜひ出席して下さい。(【じんぶん倶楽部-沖縄ピースカフェ】参照)

これまでの戦跡巡りの学習と併せて沖縄に残されている手つかずの自然を満喫するプログラムも立てました。また8日間の旅のうち一日は自由行動として、少人数で自分達の関心に合わせて沖縄を楽しむことができます。

2004年度は、8月23日(月)~8月30日(月)に行います。

【クリスマス実行委員会】

学生が中心になって「クリスマス関連行事」を実施します。学内のクリスマス装飾の企画・作製・飾りつけや学生参加による「クリスマス礼拝プログラム」企画と運営を行います。明治学院大学らしいクリスマスと一緒に演出し、お祝いする機会となります。

【クリスマスツリー点灯式】

クリスマスを迎える約一ヶ月前、白金、横浜両校舎で電飾されたクリスマスツリーの点灯式が行われます。白金校舎では、高校と大学が協力し合って計画、実施しています。学内各所のクリスマスツリーにそれぞれ点灯し、毎日夜11時まであかりを灯されたツリーがクリスマスシーズンのキャンパスを彩ります。横浜校舎の点灯式は、学生サークルのL.M.S(軽音楽サークル)や舞台技術研究会が中心になって、学生主体の行事として盛大に行われます。また近隣の方々や保育園の子どもたちも参加しており、大学と地域の交流の場にもなっています。

【市民クリスマス】

横浜校舎のチャペルで行なわれる、地域住民を対象としたクリスマスの集いです。特に子ども向けのプログラムによって進められています。

【クリスマスコンサート】

クリスマスを祝したコンサートが両校舎で行われます。白金チャペルでは、イギリス大使館クワイヤのチャリティコンサートが、恒例になっています。横浜チャペルでは、パイプオルガンとフルートの演奏を中心とした『風のうた』というコンサートが開かれています。

【クリスマス礼拝】(横浜校舎のみ)

12月13日はクリスマス特別礼拝として、通常のチャペルアワーの時間帯に時間を延長して行われます。礼拝の中では、学生団体によりクリスマスにちなんだ曲も演奏されます。今年の礼拝では、学生バンドが演奏し、いつもとちょっと違った雰囲気でした。

【クリスマス燭火礼拝】

白金チャペルの12月15日(水)と横浜チャペルの12月17日(金)のクリスマス特別礼拝は、燭火(キャンドルライト)礼拝です。白金チャペルの礼拝後には、キャロル(クリスマス讃美歌)を歌いながら歩くキャロリングも行います。蠟燭の火だけが灯されたチャペルで、音楽と瞑想とメッセージの荘厳な礼拝が行われます。

【クリスマス音楽礼拝】

毎年12月23日に、明治学院の卒業生・在校生・教職員が集まって厳かにクリスマスを祝って、白金チャペルで行われます。

クリスマスの名曲はたくさんありますが、その中でもキリストの誕生物語を音楽にしたバロックの宗教音楽を中心に、音楽をちりばめたこの燭火礼拝は、巷のクリスマスとは違う心安らかなひとときを与えてくれます。家族で参加も歓迎です。

【宗教部・宗教センターの連絡先】

宗教部のホームページでは、毎日のチャペルアワーの情報はじめ、主催プログラム・行事の案内や学生の感想などを中心に構成しています。

<http://www.meijigakuin.ac.jp/~shukyo/>

白金事務室 記念館1階
〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37
電話 03-5421-5218 FAX 03-5421-5459
電子メール shukyos@mguad.meijigakuin.ac.jp

学院牧師室 白金校舎インブリー館2階 電話 03-5421-5228
オルガニスト 白金校舎記念館1階 電話 03-5421-5227

横浜事務室 チャペル脇建物1階
〒244-8539 横浜市戸塚区上倉田町1518
電話 045-863-2016 FAX 045-863-2017
電子メール shukyoy@mguad.meijigakuin.ac.jp

正規授業科目〔明治学院科目〕について

2004年度生以降の学生は、明治学院科目である「オルガン実習1」「オルガン実習2」「ワークキャンプA」「ワークキャンプB」(各2単位)を卒業単位科目として履修することができます。以下は、講座の概要です。

オルガン実習1・2

担当教員の事前履修許可が必要。任意のオルガン講座を1年半受講した者のみが履修可能。

半期2単位科目。

【講義のねらい】パイプオルガンの演奏を習得する。並びにこの楽器の生まれたヨーロッパの音楽史・社会背景・他の学問との関連(修辞学・美術・言語等)も学び、オルガンがヨーロッパ社会・歴史・宗教に与えた影響を広く学ぶ。

【講義内容】各キャンパス内チャペルのパイプオルガンを使用し、個人レッスン形式(各人のレッスン日時は講師との相談で決められるので、レッスンの日時は各人異なる)で行う。その他に各人にパイプオルガンを使用しての個人練習時間が与えられる。必ず練習の上レッスンに臨むこと。オルガンの成立と歴史、楽器の構造、バロック時代までの様式(楽器・楽曲共に)の3点に重点を置き、随時講義も行う。J.S.バッハ以前の様式と語法を理解し、この時代の演奏法を習得する。

【教科書・参考書等】“A guide to duo and trio playing”(J.v.Oortmerssen 著、Boeyenga-Sneek, Holland)、“Organ Technique”(J.v.Oortmerssen 著、Göteborg Organ Art Center)、「古楽とは何か」(N.アーノンクール著、音楽之友社)。

【成績評価の方法】出席50点、実技試験50点(試験時に演奏する課題曲と作曲家等についてのレポート提出を含む)。

【その他】同講座受講希望者には4月にオーディションが課せられる。宗教部事務室に問合せの事。

ワークキャンプA・B

「ワークキャンプA」「ワークキャンプB」は、同時履修すること。4単位はセットで認定される。

【講義のねらい】主に住宅建設を行う海外でのワークキャンプの経験および事前・事後の研修・学習を通じて、第三世界における社会・政治・経済の諸問題、都市および農村部の住宅問題、南北問題、開発と教育に関わる諸問題、NGO/NPOの活動とボランティア、リーダーシップ、異文化コミュニケーションなどについて、多様な視点から学ぶ。

【講義の内容】5月の説明会の後、6月から8月にかけて合宿を含めて12回程度の事前研修会を開催(参加予定者間で日程を調整)9月中旬に2週間の海外のワークキャンプを実施し、帰国後、報告書を作成し、課題に基づいて学んだことを報告会で報告し、講座を終了する。

ワークキャンプは、現地のNGO(ハビタット・フォー・ヒューマニティ)と協力し、主に住宅の建設作業が中心の活動を行うが、「開発と貧困」に関わる他のNGOの活動に参加し、経験を深める機会も与えられる。

実習費用は、ワークキャンプ参加費が12万円程度で、その他、事前研修の合宿等に1万円程度を徴収予定。参加募集定員は、25名程度。宗教部担当教員が引率・指導を行う。

【教科書・参考書等】必要であれば、事前研修の際に紹介予定。

【成績評価の方法】事前研修、現地でのワークキャンプ活動、事後の報告を通じて、評価する。

【その他】5月の説明会で、ワークキャンプの日程および参加費用等の詳細を説明するので、宗教部からの掲示を注意してみることに。

宗教部の活動に参加して

オルガン講座を受講して

芸術学科 4年 小西恵子

私がオルガンという楽器に出会ったのは、大学に入ってからである。それまでは、オルガンに触れたことがないのはもちろんのこと、一体どんな楽器なのかということもほとんど知らなかったのだ。だが、ひと目オルガンを見たとき、まずその大きさに圧倒されてしまった。と同時に、オルガンってなんだか不思議な楽器だな、どこから音が出ているのだろう、演奏者はどこにいるのだろう、とにかく触ってみたい、などと思うようになった。そして、これらの好奇心からこの講座を受講するに至ったのである。これがオルガンとの初めての出会いであった。

最初は、ほんの好奇心で始めたオルガンであったが、今ではすっかりその魅力のとりこになってしまった。オルガンは、そのサイズも、音もとても大きい楽器である。静かなチャペル内に響きわたる音色は、なんともいえない美しさを持っている。チャペルに差し込んでくるやわらかな光は、幻想的な空間を生み出し、その空間にオルガンの音色が響きわたるとき、まるで音に包みこまれているような気分になり、とても心地のよいものであった。

だがやはり、オルガン講座を受講して一番大きかったと感じることは、オルガンという楽器を通じて、さまざまな人たちと出会うことができたことである。それは私にとって、とても大きな財産となった。オルガン講座では、様々な場面で、本当にいろいろな人たちに助けられ、支えられてきた。人と人の繋がりの大切さを改めて感じる事ができた。気が付けば、オルガン講座は学生生活と切り離せない、また生活の一部を占める重要なものとなっていたのである。

このような場を与えてくれたオルガン講座では、言葉で言い尽くせないほどいろいろな経験をさせていただきました。どうもありがとうございました。

オルガン講座を受講して

出会い！

国際学科 4年 永井 香奈子

二年生の春休み、私はある旅先の教会の礼拝でパイプオルガンに出会いました。その音色には神聖さ、美しさ、荘厳さ、安らかさなど様々な魅力が詰まっていて、たった一台の楽器なのにオーケストラのような迫力を感じました。さらに、その教会が何百年も前から存在しているという事実と、キリスト教に根付いた文化を全身で感じ、私の感動をより一層高めました。それは感動というよりもむしろ衝撃と言えるほどで、旅から戻ってもその音を忘れることはありませんでした。

三年生に進級した年の春、大学のチャペルでパイプオルガンのレッスンを受けられることを知り、すぐに申し込みました。レッスンが始まると、パイプオルガンがいかに複雑で幅の広い楽器であるかということを知りました。そして、この「オーケストラのような」楽器をたった一人で弾くためには、相当な練習が必要だと分かりました。時間は限られていましたが、パイプオルガンを演奏するという恵まれたチャンスを常に楽しみながら練習を続けました。

練習が進むにつれ、私はパイプオルガンが持つ無限の音色に魅了されていきました。パイプオルガンには何百本というパイプがあるので、一つの曲でも本当に様々な表情が出せます。しかし、使いこなすことは決して楽ではありません。先生が次の課題曲を目の前ですらすらと演奏された時には、まるで神を見ているような気分になりました。それでもパイプオルガンが好きだから、必死に練習しました。そして曲が弾けるようになるといつも、何ともいえない達成感や嬉しさに包まれました。

私はパイプオルガンを学んだ2年間で数え切れないほど多くの貴重な経験ができました。その柱となっているパイプオルガンとの出会い、先生との出会い、キリスト教との出会いなどは、私の大学生活の中でかけがえのないものになりました。卒業後もチャペルで得た宝物を失くさないように、いつまでも輝かせていきたいです。

クリスマス実行委員会の活動に参加して

クリスマス装飾の楽しみ

白金図書館職員 宮城玲子

「クリスマス委員を募集中。学生・教職員でキャンパスのクリスマス装飾の企画・制作・飾り付けをやりませんか」。このポスターの文句に惹かれ、電飾班でイルミネーションをデザインしたい! と思いました。

クリスマス委員の顔合わせは、1890年に建てられた赤煉瓦造りの瀟洒な記念館。1階集会室に15人ほど集まり、それぞれどういうイメージを描いているのか思いつくままに意見を出し合い、自由に感想を言っていきます。

「学生がいつも利用する場所に飾りたい、例えばトイレの扉」「ツリーのライトをもっと明るくしたい」「環境も考えエコロジカルな素材を使う」「クリスマスリース・コンテストを行い学生の感心を高める」「ヴォーリス広場のテーブルにキャンドルと小さな飾りを置いてカフェ風に」「C館前からチャペルまで照明で少しずつ明るくしていく」等々…。

私は仕事の都合で打ち合わせにはほとんど参加できませんでしたが、メーリングリストで最新の情報がわかり、白金のクリスマスツリーの飾り付けや広場の木に結ぶリボン作り、図書館や学生課の各カウンターに飾られたツリー型デコレーション作りのワークショップに参加しました。

クリスマスの日まで飾りの手入れをするのも委員の役割。本物のモミの木・姫リンゴなどで作ったリースやデコレーションからは、植物の力強い豊かな香りがします。水遣りをしながら、日ごとにクリスマスを心待ちにしている気分になってくるから不思議です。

学校から帰る時、間にキラキラと暖かい光を放つクリスマスツリーを立ち止まって見上げている人を見かけるとちょっぴり嬉しくなりました。キャンパスのクリスマスの演出を自分たちのアイデアで創り上げていくことができるのです。2004年のクリスマスはどんな雰囲気になるのでしょうか。

クリスマス実行委員会の活動に参加して

経営学科4年 榎本 真弓

私は今回初めてこのクリスマス実行委員会の活動に参加しました。不覚にもこの実行委員会に加わる時期が遅かったせいで、他の人より参加できる機会が少なかった事を今になって残念に思いますが、それでも活動していたひとときはとても充実し楽しいものでした。

私が最初に行なった仕事は、チャペル内にあるツリーの装飾でした。電飾やリボンを付けていくのですが、何しろ全長3mもあるツリーです。出来上がりは本当に立派なものでした。スタンドグラスを通して入ってくる柔らかい光に包まれるチャペルとそこでピカピカ輝くツリーは本当に綺麗で、見ている人の心を穏やかにするようでした。

また、クリスマスのオーナメントとして、ヒバ、モミの木などの枝やリンゴを使ってミニツリーを作ったりもしました。生の枝とあって部屋の中は緑の香りでいっぱいになり、みんなとの会話も弾んでとても楽しい時間でした。出来上がったミニツリーはそれぞれ校舎内に飾るのですが、自分達で作ったという事もあって情が湧いてきたりして…。

その他にも普段は入ることの出来ないインブリー館のツリーを装飾したり、クリスマス礼拝の受付等の手伝いをしたりと貴重な体験が出来ました。

このように学校内にクリスマスの装飾をし、チャペルでクリスマス礼拝等を行うのも、プロテスタントの精神を持つ明治学院だからこそできる事ではないでしょうか。今回この活動を通し、改めて明治学院の魅力を実感しました。

もっと早くから参加していれば良かったという思いを残しつつも、大学生活最後にこの活動に参加できた事を本当に嬉しく思います。私は今年で卒業なのでもう参加できませんが、これからは是非このような活動を大切にしていってほしいです。そして在校生の皆さんの手でもっと盛り立て、今年の12月には明治学院を去年にも勝るクリスマス色に染め上げてほしいです。

アジア学院ワークキャンプに参加して

英文学科 4年 立花 圭子

私は、今までアジア学院のワークキャンプに3回参加させて頂きました。

初めてワークキャンプに行った時は、自発的な参加の意志はなく、むしろ行かなければならないという義務感から行きました。自分のお金を出してまで汗を流して農作業をする等、正直に言えば最初は絶対に嫌でした。しかし行って見ると、案外辛い作業の中にも楽しさを見出すことができました。それは、そこで知り合える仲間がいてくれるからでもあるし、「若い時には買ってでも苦勞をしなさい」という言葉が支えになったからでもあり、アジア学院は私の夏の風物詩の一つになりました。

アジア学院に行くと、毎年いかに自分が非力で小さいものなのかということに身に染みて感じます。と同時に、自分は試されているということでもあり、今まで気づかなかった自分が見えてきたりします。毎年参加させてもらうことによって、新しい発見がその都度あります。

アジア学院には国境を越えて多くの人々が学びに来ますが、彼らと話をしていると、自分の偏った固定観念が視野を狭めていたということに気づかされます。人種、言葉の違いを超えて、ぶつかり合いながらも、それぞれ自分たちのペースで彼らはアジア学院というコミュニティで生活を共にしているのです。

例えば、アジア学院では午後に屠殺した鳥が夕食にでたりします。その鳥は先ほどまで生きていたのです。鳥も直感で今捕まったら殺されるということを感じるのでしょうか？ものすごい声を出して鳴き、小屋の中を逃げ回るそうです。暴れ回るのを押さえ込み、首を切り、逆さまにして血を抜いて、毛をむしって包丁でさばいていく…。古い仏教の本に「子肉想」という不思議な言葉があります。その意味は「子の肉を食べる想い」とあります。その昔、タクラマカン砂漠などへの困難な長途の旅に子供を連れて行くこともあったようですが、タクラマカンは、ウイグル語で「入ったら再び出てこれないところ」という意味があり、飛行機や車等ない昔の旅は命懸けだったわけです。その場合、体力のな

い子供は先に亡くなることが多く、その子供の肉を親たちが乾燥肉にしたりして食糧として命をつなぎ、旅を続けたというのです。むろん、獣のようにむさぼったわけではありません。申し訳ないと泣きながら食べたのでしょう。そうしてでも旅を続けなければならなかったわけです。

実際、私たちは毎日たくさんのものの命を頂戴して自分の命を養わせてもらっています。だから、食事を頂戴する時は、我が子の肉を食べるような思いで食べるべきであって、決して「おいしい」「まずい」と言った気持ちで食事をしてはならないという戒めの言葉、それが「子肉想」の真の意味だと思うのです。

食事は目の前に出されたものを心から感謝して頂けば良いわけで、しかし、そんな当たり前のことも忘れてしまっていた自分に気がついたのです。

アジア学院に来ると、「自分が今こうして生きている」ということは、自分の力で生きているわけではなく、実は「周囲によって、他の人々によって支えられて生かされていたのだ」と実感することができるのです。

人間は一人では生きていけないにもかかわらず、他からの干渉をたいへんに嫌う傾向があると思います。ことに現代の社会では、朝から晩まで次から次へとたくさんの人や情報とつきあわされるものですから、時には一人きりで静かに過ごせたらどんなに良いだろうかと思ってしまうことがあります。では、他からの影響が全く無くなってしまったとしたら、どうなるのでしょうか？

心理学の実験で、志願者を募り、人との接触はもちろん、音も情報も全く届かない個室に耳栓をし、目隠しをして一人で入ってもらい、そこで人がどうなるかを調べた実験があります。「個室に入っているだけで、何もしなくていい」という約束ですから、志願した人は最初はぐっすり眠っていますが、そのうちに眠れなくなります。そうすると、退屈でたまらなくなり、独り言を言ったり、歌を歌ったりし始める。またしばらく経つと、幻覚が現われてくるのだそうです。それはきわめて暗示にかかりやすい状態で、実験者が「2+3はいくつだ？」と問うと、「5です」と答えるのですが、「2+3=6ではないか」と問い返すと、「すみません、間違えました」と簡単に暗示にかかるそうです。

外界と完全に遮断され、全く刺激が与えられないと、よりどころがなくなり、自分という存在があやふやなものに思えてくるのです。

文字通り、人間は「人と人との間にあって生きる社会的生物」なのです。自分という存在は、周囲の人、周囲の物との関係によって今ここにこうして存在しているわけで、それが確認できないと生きていけなくなるのです。

そういう数限りない存在との関係によって、自分が今こうして生きていることを知ると、「自分の力で生きている」等とは言えなくなるはずで、自分の力で生きているつもりでいたのが、実は周囲によって、他の人々に支えられて生かされているのだと気づかされずにはられません。

「恩を知る人」のことを、仏教圏のある言葉では、「カタンニュー」。これを直訳すると、「なされたことを知る者」という意味ですが、自分が今こうしていられるのは何故かとその原因に思いを馳せる心、それが「恩」という字に込められているのです。

今盛んに言われている「エコロジー」という言葉は、ギリシア語のオイコス（家）とロゴス（理論、言葉）という二つの言葉からできているのだそうです。つまり地球を一つの家とみなし、そこに存在するすべてが共生するための理論、それが「エコロジー」ということなのです。

そうした様々な存在と自分が一体のものであるという関係を、自然と共に生きてきた多くの人たちは体で理解していました。例えば、アイヌの人たちは、鹿を捕らえてその肉を食べる時必要な分だけ取り、残りの肉は木の枝にかけて、ふくろうに食べさせたのです。また、笹やぶの中にも肉を

置きました。キツネやタヌキのためです。

「すべては神のものだから共に分け合って生きるのだ」という考えを持っていたわけです。そういう謙虚な心を、今私たちは忘れてしまっているということが問い直されているのです。

自分を支えてくれている多くの存在によって生かされていることに気づくと、周りに感謝せずにはいられなくなります。そして、自分のことだけではなく、周りのことを考えずにはいられなくなり、自然に生き方が変わってくるはずで、

豊かかって何だろう？

ものがたくさんあることかな？

食べものがたくさんあるってことかな？

いろんなことが便利になっていくことかな？

ほんとうの豊かかってなんだろう？

これからの人生を豊かに生きていくためのヒントを、アジア学院で感じられた気がします。

アジア学院ワークキャンプに参加して

真実を知る勇気を持つことから

経営学科 3年 石原 博美

アジア学院ワークキャンプで何より深く印象付けられたのは、留学生との懇親会だった。私はケニアからの留学生と言葉を交わしたことで、ケニアのストリートチルドレンの問題を改めて意識することとなったからだ。「なぜストリートチルドレンが多数生まれてしまうのか？」と彼に尋ねると、「大きな原因の一つはH I V感染である」と答えた。両親をエイズで亡くし、残された子供たちがストリートチルドレンとなり、社会問題となっているという彼の回答は、日本の新聞でもテレビでも何度も報道されて、知識として知っただけで現実としては見ていなかったのだ。

思えばニュースを見ても、本を読んでも、これらの情報はただ知識だけの遠い国での出来事で、悲惨な状況を見るとつらいだけに、今まで直視しようとしなかった。アジア学院で大切に育てている豚や、牛、鶏が屠殺されて食肉に加工されることも、地球に飢餓で苦しむ人がいることも、爆撃に遭って理不尽に死にゆく人がいることも、みな頭でわかっていることでありながら、様々な快くない現実から目をそむけてきた。

真剣な眼差しで自国の問題に立ち向かおうとしている彼の話は、日本語で書かれた新聞記事よりもはるかに現実味を帯び、私の隣で語りかけているこの人の言葉は、もはや遠い国の話だけでは済まない気がした。しかし、自分が置かれている状況を考えてみると、話を聞く以外にできることなど何もなく、無力さを改めて味わうことになった。このような機会に触れた私は、せめて現実が何であるかを知っておく義務があるように思った。

彼のように真剣になっている人がいることを、多くの人を知ることで何かが変わっていくような気がする。それにはまず、私自身が目をそらさず、真実を知る勇気を持つことから始まるのだろう。

来年のアジア学院ワークキャンプにはできるだけ多くの学生が参加し、ぜひ、彼らの真剣な眼差しに出会ってほしいと思う。真実を知る勇気を

持つ者が一人でも多くこの世界に存在していくことにも、様々な問題解決へ向けての大きな意味があるのではないだろうか。

フィリピン・ワークキャンプに参加して

家を建てるという事

社会福祉学科 1年 丸谷 由理

私はこの大学一年生の夏にひとつの大きな経験をしました。それは、訳あって劣悪な住環境の中で暮らしている人々の「家」を新たに建てに行く海外ボランティアに参加したことです。

当初、私は「家」を建てるというボランティアの内容はどうでもよく、ただ海外ボランティアそのものに漠然と興味を持っていた、という単純な理由でこのワークキャンプに参加することを決めました。こうして私のフィリピンでの二週間は始まったのです。

そんな私に「家」を建てに行く必要性を感じさせてくれたのは、フィリピンについてすぐのことでした。バスで移動中の景色は、日本ではありえない光景でした。その光景とは、一見、新宿で見られるような高層ビルがたくさんあり決して貧困という感じを漂わせていないのですが、一方では、住宅といえないような板一枚の壁の家がたくさん建っているというものです。極端に言ってしまうと、今皆さんが住んでいる家の横にホームレスが住んでいるようなダンボールの家が建っているような感じでした。その景色を見た瞬間、「家」を建てるということに対して真剣に考えていかなければいけない、そう感じたのです。その時から、「どうして「家」を建てるんだろう？」これが私のキャンプのテーマとなりました。

「家」を建てる作業、ワークが始まりました。そこは何もないただの地面で、あるものといえば、作業する小屋、私たちの休憩所、そしてトイレくらいでした。作業はホームパートナーと呼ばれる、将来そこに住む人たち、つまり、今は私たちがバスの中から見た住宅とは呼べないような家で暮らしている人たちと一緒に行われます。作業の内容は、水路を作るために土を掘ったり、セメントを運んだり、ブロックを作ったりと、なかなか力のいる作業で、おそらく私たちの力は全く役に立っていません。ワークでは、自分の非力さや無力さに憤りを感じ、私は「家」を建てられているんだろうかと、とても不安でした。今だけ

ら言えることですが、自分の非力さが悔しくて、作業が嫌になってしまいうこともありました。「私は一体ここに何しにきているんだろう？」「私は作業の効率を下げているだけではないのか？」と。

しかし、そんな私の不安や心配を取り払ってくれたのは、現地の人々つまりホームパートナーの人たちの私たちに対する接し方や態度でした。どんなに私たちが不器用で力がなくても、彼らは、わざわざ固い土をやわらかくして私が掘りやすいようにしてくれたり、つきっきりでブロックの作り方を教えてくれたり、作業中も仕事を楽しくしようと歌を歌ってくれたり、タガログ語を教えてくれたりと、私たちに対してとても親切に接してくれました。中には、「疲れてない？」「休んだほうがいいよ。」など私たちの体調まで気にしてくれている人さえいました。私は、彼らのこの優しい心遣いや笑顔に助けられたのと同時に、なぜこんなにまでして私たちのことを気にかけてくれるのだろうと、不思議に思うようになりしました。でもその答えはすぐに出ました。それはホームパートナーの私たちに対する態度そのものに答えがありました。彼らは私たちを大切な仲間として受け入れてくれているから、私たちのことをとても気にしてくれているのです。もし大切な友人や仲間が悩んでいたり、困っていたりしたら、もちろん助けてあげたいと思いますよね？もし大切な友人や仲間の体調が悪そうに見えたら、もちろん心配しますよね？彼らもそれと同じことを私たちにしてくれていたのです。そう私が気づいた瞬間、それまでの不安や心配は一気になりました。「こんな私でも彼らは仲間とってくれている」「こんな私でも彼らは必要としてくれている」と思ったら、「家」を建てるのがとても楽しいことだと思えるようになりしました。

そのようにして私たちが彼らと親しくなるにつれて、彼らは自分自身のことをたくさん話してくれるようになりしました。それは、自分の家族のこと、仕事のこと、そして、将来の夢などです。彼らは「家」を建てることにより、夢や将来への期待を抱くようになったのです。今まで「家」とは呼べない家で生活してきた彼らは、初めそんな夢や希望を抱いていなかったそうです。しかし、きちんとした住環境の「家」を建てることによって、その「家」が彼らに夢や希望を与えたのです。彼らの表情は本当に生き生きとしていて、世界中の誰よりも輝いて見えました。彼らは誰よりも「生きている」のです。

私はそんな彼らを見て、「家」を建てることの意味がわかりました。「家」は彼らを「生き」させているということ。それはつまり、ただ生とか死とかという問題ではなく、彼らが、誰よりも輝ける人間として「生き」ようとするきっかけを「家」が担っているのです。私は彼らのその「生きている」姿にとても感動しました。私は彼らのように今「生きている」のだろうか？きっと今の私では彼らにかなうことは出来ないと思います。だからこそ、彼らの「生きている」姿が私の中で輝いて見えるのです。これが、私がフィリピンで出した「家」を建てることの意味の答えです。

私はフィリピンに行って「家」を建てるという作業が出来、幸せだと思っています。それは、大切な仲間であるホームパートナーの夢や希望の実現のための手伝いが少しでもできたからです。彼らの「生きている」姿を見ることができたからです。私はまた彼らの村にもう一度、必ず行こうと考えています。それは、彼らの「家」が建て終わった後の彼らの「生きている」姿を見たいし、それよりも、私自身が彼らに負けないうらい「生きている」ということを彼らに見てもらいたいというのが一番の理由です。

フィリピン・ワークキャンプから一ヶ月。私は「生きて」います。私は、明らかにフィリピンに行く前の自分とは違います。もっと多くの経験をして、学び、考え、そして成長していく...私はこれからそうやって「生きて」いきます。フィリピンにいる彼らに負けないうらい「生き」ようと思います。そして、このフィリピンでの二週間を決して思い出などにせず私の中で活かし、私は「生きて」いきたいです。

フィリピン・ワークキャンプに参加して

自分のこと以外も考える

社会学科2年 吉村 悠

僕は9月8日から二週間フィリピンに行ってきました。ほとんどが初めての経験で、喜びも、楽しさも、辛さだって今まで生きてきた中でこんなに感情豊かに暮らした時間はない、というほどの濃い二週間だったと思います。しかし、帰ってきて一ヶ月以上経った今思うのは、「二週間って一生の中ではとても短い期間なんだなあ。」ということです。二週間は、時に人生を変えるのに十分な時間であると思います。現実には、フィリピンに行ったメンバーは、僕も含めほとんどの人が自分を見つめなおし、自分の人生にかかわる大きなきっかけを見つけたと思います。そして、チームのメンバー同士や現地の人たちとの人間関係も急速に大きく変化しました。フィリピンに行くまでは顔見知り程度だった仲間と、苦勞や喜びをともにして朝から晩まで一緒に過ごし、また、人なつっこいフィリピン人たちとの友情関係が日を追うごとに深くなっていくことに、僕はめまぐるしさと同時に喜びを感じていました。

しかし、僕らの帰国が近づいたある日、向こうですと僕らのツアーのお世話をしてくれた Jay-R というフィリピン人の青年が、「どうせ日本に帰ったら俺たちのことは忘れてしまうだろ。」というようなことを言いだしました。僕は「そんなことないよ。」と彼をなだめながらも「そうなるのかもしれない」という不安を感じていました。

あの二週間で、僕たちは色々な感情を共有し、話し合い、確実に非日常的な生活を送っていました。それは生活が常に発見に満ちていて、四六時中未知の情報が周りから飛び込んで来たからで、その時日本には身近に感じない問題がリアルに実感できて、そこにある問題に対してきちんと問題意識を持っていたと思います。しかし、日本に帰ってきて、いざ自分の周りから『フィリピンにいて感じる衝撃や問題』というものが消えてしまうと、やはり、関心が遠のいていっていると感じずにはられません。Jay-R が言っていたのはおそらくそういう意味も含めてのことだったのでしょう。僕もそういう意味で二週間が短かったと

思うのです。

僕は、日ごろから「自分のことしか考えない男」と多くの人に言われます。それは正確に言うと「今、自分の身の回りにあることしか考えられない人」だと僕は理解しています。しかし、これは僕に限らず、多くの人がそうではないでしょうか？そして、それは言い方を変えれば「自分が良ければ、人のことはどうでもいい」とも取れてしまいます。言い過ぎと思う人がいるかも知れませんが、マザー・テレサが「愛の反対は無関心だ」と言っていることを考えると、僕たちは、意図せず様々な問題に対して無関心になってしまいがちなのではないのでしょうか？例えば、今、地球環境などを考えるとき、もはや国のレベルではおさまらず、「地球」という大きな共同体レベルでの問題が多く、その解決にも地球規模で運動していかなければなりません。しかし、そうやって鳥瞰的に外ヅラを見ていると、自分には手の届かない大きすぎる問題と捉えてしまいがちですが、その共同体を形成しているのは僕たち一人ひとりであり、そのような問題は、自分たちの問題だと認識する必要があります。また、もしかしたらその問題が深刻な地域とそうでない地域に分かれることもあるでしょう。そんな時でも、僕は「もっと一人ひとりが自分以外のことも考えられるようになれば素晴らしいなあ」と思います。

そのような問題はフィリピンと日本の間にもありました。「ジャバ行きさん」という言葉を聞いたことがある人もいると思いますが、フィリピン人でも経済格差のために日本に来て水商売をしている人がいます。また、向こうの人は「ママキ」と呼んでいましたが、フィリピン人女性との売春目的でフィリピンを訪れる日本人も少なくないようです。これは両者の合意のもとに行われていることだと説明できるかもしれませんが、経済格差による性差の構造的暴力の構図が作られてしまっていると考えられます。僕たちも実際に向こうで仕事を体験させてもらったのですが、虫のわいた腐りかけのココナッツの実の外皮を機械で粉碎して繊維を取り出し再利用するという、胸が悪くなるような仕事をして、向こうでは一日数百円程度しか稼げないと聞き、虚しくて涙が出そうになりました。

僕らは、フィリピンに行くことでそれぞれ様々な問題を発見し、帰って来ました。しかし、その二週間は自分の中で、とてつもなく大事なものであるにもかかわらず、今向こうで感じた問題意識が薄れつつあり、同じ世界で一緒の時間をともに過ごしている他人（ひと）のことを考え

られなくなっていると思うと申し訳なくなります。しかし、これはきっと僕だけの問題ではありません。日本でも、最近耳にするニュースには、なぜそんなことをしてしまったのだろうという衝動的な事件が多い気がします。そんなとき、犯人になってしまった人がもう少し他人のことを考えれば、事件は起こらなかつたらうな、と思えてなりません。また、今、多くの人がボランティアに関心を持っていることと思いますが、ボランティアをするということの基本にある精神は、同じ共同体に生きる人間について、つまり「自分のこと以外」も考えるということ、それによってボランティアをする人、受ける人、その両者のより深い社会参加、社会作りへとつながっていく、ということです。他人のためにすることは社会のため、ひいては自分に返ってくることとなるのです。少し遠回りなやり方ですが、「情けは人の為ならず」と自分に言い聞かせて、回り道でも「自分のため」になることをして行って欲しいです。

世の中の問題は、ほんとに身近な問題から、知っている人があまりいないような問題まで様々だと思います。まずは、そんな問題を知る必要があるでしょう。ですから、みなさんもこの機会にこのような問題について考え、他人について今よりいっそう考えられる人間になってくれるとうれしいです。

ボランティアもまた社会と自分との関係を意識しながら、そして、単純なことですが『人を思いやりながら』やる仕事はその効果も自分に返ってくるものも大きく変わってくるのです。メンバーの日記の中で僕は、ワークの最終日に「涙を流せなかった」と書いていました。今考えると、「もっと家作りの役に立ちたい」と悔しがっていたメンバーほど涙を流せていたと思います。僕が涙を流せず、自分自身に納得がいかなかったのは、「これは自分のためだ」と考えることで無理をせず、甘えがあったからなのかもしれません。そう考えると、残念ながら僕はフィリピンでは本当の意味でのボランティアをすることができなかったと思います。しかし、こうやって今度こそ本当に大切なことを学びました。『失敗から成功が生まれる』、昔の人は言いましたが本当に正しいことです。多くの人が「自分のためにボランティアをやる」時代に、回り道をする「自分のため」という見方を知っていてもらいたいです。そうすれば、今より数倍ボランティアが楽しくなって、数倍感動し、成長し、数倍住みよい社会になる、と思います。

フィリピン・ワークキャンプに参加して

経営学科3年 伊達 佳奈

ホームステイ先のアサンバでは、ゴミを減らすために独自のプロジェクトを立ち上げていました。ココナッツの殻（ゴミとなるもの）を購入してきてそれを加工したり、紙に留めてあるホッチキスはずして分別するなどして、新たな資源として売ります。ゴミを利用してひとつのビジネスを行っているのです。日本と違い、政府がゴミの分別やリサイクルを活発に行わないフィリピンにおいて、アサンバ地域内のゴミのリサイクル活動は、単にゴミを減らすというだけでなく、雇用の場も提供しているという点で感心しました。ただ、話を聞くと、そこで働く人々の仕事に対するやる気があまり見られず、ときには仕事をさぼって家に帰ってしまうこともあるそうです。コミュニティ内で運営されるリサイクルビジネスという点では感心したけれど、そこで働く人々の管理という点ではまだまだ改善していかなければならないことが多々あると感じました。たくさん仕事をこなせば、その分さらに仕事は回ってくるし給料も増えます。そういった良い循環を生み出すまでにはもう少し時間がかかるのかな、と感じました。

私のホームステイ先は、母・子ども（15歳、7歳）、祖母の四人家族でした。お母さんは当サイトのスタッフの方で、私たちのためにご飯を作ったり、いろいろな面でお世話をしたりしてくれました。家は工具店で、お兄ちゃんも学校から帰ってくると店番をしたりしていました。そのお兄ちゃんは音楽が好きで、CDが何十枚も積み上げられていたので、たくさん持ってるね、と話しかけると、これは全部お父さんの、と教えてくれました。彼のお父さんは数年前に亡くなってしまったそうで、そのせいか他の家庭に比べると家の内装はあまり手がつけていませんでした。しかし、CDコンポやテレビなど一見高級そうなものもたくさんあり、思ったより豊かな生活を送っていると感じました。

初日は家に着くのも夜遅く、あまり話もできないまま寝ることになり、ホームステイにかなりの不安を感じていたけれど、翌日、お母さんの弟も遊びに来て、私たちも写真を見せたりしながら、夜12時、1時近くまで話すことができました。話の中で、日本人はタバコの吸殻をちゃんと

捨てるけどフィリピン人はマナーがなっていないと言っていました。また私がマニラはすごく発展していると言うと、大きい都市だけマニラはとても汚い、と自分たちで非難していました。フィリピンの人々も国のゴミや排気ガスなどの環境問題は深刻に受け止めているようでした。国民一人ひとりの問題意識が国を動かしていくと思うので、数年後、フィリピンがそれらの問題に対しどれほど取り組んでいるか楽しみです。

「コミュニケーションの手段は言葉だけじゃないよ。」その事を教えてくれた仲間に心から感謝しています。想像はしていたけれども、私は言葉の壁にぶつかり、フィリピンでの生活三日目くらいから早くもギブアップ気味でした。日本人にとってもフィリピン人にとっても、英語は母国語ではない。同じ立場なのに、むこうからの問いかけに思うように答えられない自分に、もどかしさと劣等感を感じていました。

そんな私も、子どもたちといるときは言葉なしで遊ぶことができたため、思いっきりはしゃぐことができました。気分的にも楽で、とても楽しかったのですが、現地の状況などを聞いたりすることはできなかったため、心から満足できるものではありませんでした。でも、私は言葉にこだわりすぎていたのかもしれない。笑いかけたり、泣いたり、歌ったり、手をつないだり、抱きしめたり、それら全てがコミュニケーションであり、コミュニケーションの手段は言葉だけではない。私は旅の終わりになってやっとそのことに気づかされました。それを知ったとき、心の中に立ち込めていたどんよりした雲のようなものがスッとなくなったような気がしました。それまで否定的に見ていた自分の行動が肯定的に見られるようになりました。私も自分なりにちゃんとコミュニケーションがとれていたのです。友人の言葉で、その2週間の過ごし方は決して無駄なものではなかったのだと思えるようになりました。

私はこの旅で、かけがえのない友達に出会うことができました。悩みを一緒に共有してくれた友達。いろんなヒントを与えてくれた友達。一人で解決できないことでも友人の力を借りることで解決することが出来ました。

今回のワークキャンプで学んだことは友達の大切さであり、人との出会いは自分の成長にもつながるということです。私は今回の経験から今まで以上に友達とのつながり、人との出会いを大切にしていき、自分も思いやりを持って人と接することを心がけていこうと思いました。

沖縄から平和を考える旅に参加して

2003年・夏に見た事、考えた事について

社会学科4年 新谷 郁恵

沖縄から平和を考える旅に参加し、楽しく食べたり飲んだり、歌ったり踊ったりした。大勢の人達と出会って色々なことを見聞きして、沢山考えたりボーっとしてみたり...一言では言えませんが、最高でした。自炊大会や宴会、罰ゲームに一発芸の練習。シュノーケル、山登り下り。楽しいことは本当に数え切れない充実ぶりでした。

ひめゆり平和祈念資料館の中で語り部の方が話してくださった事は、戦後半世紀以上経っている今でもものすごく心に響いてきた。ガマの中での様子や友人が亡くなった話、現在でも残っている心の傷の話、そして「こんな戦争をもう繰り返さないでほしい、今ならまだ止められますから...」と話してくださった。実際に入ったガマは、懐中電灯を消すと自分の手も見えなかった。あんな暗いところで、ケガ人がうめき声をあげていて、日本兵に脅されて、外には「鬼畜米兵」がいて...地獄のようだっただろう。あの場所で子供から大人まで沢山の人が死ぬ事と隣りあわせて隠れていたと思うと、戦争の悲惨さを感じた。

今回、おなじ地区にあったのに生と死が分かれた二つの対照的なガマを見学した。シムクガマの中にはハワイ帰りでアメリカの文化と言葉を理解している人がいた為、シムクガマの千人は生還する事ができたそうだ。もう一方の子ビチリガマは、元日本兵や看護婦がいて自決を選んだ。家族や知人同士が殺し合いをしなくてはならないという、とても悲惨な状況だったそうだ。要するに日本の皇民化教育、日本軍による住民への圧力というものが子ビチリガマにいた人々に死を選ばせたのだと思う。旧日本軍が住民を守るところか危険なガマ入り口に追いやったり、スパイ容疑をかけて殺したりと、同じ日本人同士なのに戦争下での心理状況は異常だった。生きるか死ぬかという決定的な瞬間に教育や常識がとても大きな判断材料になるけれど、皇民化教育を受けた人々の常識は現代に生きている私の常識とはちがうものだった。このように教育によって人の考えをつくり上げられるという事は怖いと感じ、人間づくりや教育

がどんなに重要かを考えた。

また、そのガマで亡くなった人達の親類や友人は、どんな思いでガマの集骨をし、どんな思いで今生きているのだろうか。アメリカ軍には、民間人を殺さないという決まりがあったらしい。しかし日本の教育によって誤った知識を持たされた人々は、つかまって死ぬくらいならば自ら死を選ぼうと考えた。本当にやりきれない最期だっただろうと思う。ガマから出て行くときに、戦争をしていない時代に生きていて幸運だと感じた。

戦後五十年以上が過ぎたのに日本の基地のほとんどが沖縄県にあって、有事になったときには当然基地は攻撃の対象になってしまう。海と森を破壊して、生活する人の邪魔もして「平和を維持するために必要なものだ」といって基地が存在している。けれど基地や兵隊は戦争をするためのものなのだから、どうすりかえてみても平和と基地がなぜ結びつのかわからない。

ただ沖縄の基地問題は、日本とアメリカの関係が今のままである限り終わらないものではないかと思う。現在沖縄は日本の県であるけれど、アメリカ軍の基地が本当に沢山あるという現状があり、基地に対する感情も世代によって異なるようだった。私は基地のある生活がどんなものなのか知らないで、基地の近くで暮らしている人達が現在基地に対して本当はどんな感情を持っているのか想像できないが、生まれたときからあたりまえのように基地があつたら違和感なく生活するかもしれない。戦中・戦後を過ごした人たちにとっての基地と、私達の世代とでは、基地のとらえ方が違うかもしれない。基地がある事の長所と短所のどちらが大きいのだろう。ただ単純に基地がなくなればそれで全てが解決するのだろうか。基地がある事で基地内での雇用もあるわけで、もしも基地がなくなれば失業する人もいる。それも問題だと思うし、基地を外から見る事と中から見る事はまったく違う。けれど、基地が兵隊、艦隊、軍用機の為にあって、戦闘の拠点となる事は確かだ。

本土から見た沖縄の基地問題と、沖縄から見る基地問題も違うものだと思う。沖縄から基地問題や平和について考えるという事は、ただ資料を読んだり統計を見たりするだけではわからなかった事が多かった。沖縄の事なのに本土の政府が決定権を持ち、「国」としての責任を沖縄に押し込めている気がした。今まで沖縄の離島を旅しながら綺麗なところを

たくさん見てきたけれど、思い返すと私が訪れた島々のほとんどには慰霊碑や戦争にまつわる碑があった。沖縄を歩くと戦跡にぶつかり、戦跡のすぐ側には基地がある。嘉数展望台からも、佐喜眞美術館からも基地が目の前だった。とても大きな矛盾点があるように思った。

地上戦が行われた沖縄の戦跡をめぐったり、話を伺ったりして平和のありがたみを感じていたので、彫刻家の金城さんの作業所で見たレリーフと有事法についての話がかかなり印象的だった。有事法の本当のところは戦争をするための法律だから日本の持つ憲法第九条に反している法律である。いったい何のために戦争などするのだろうか。戦争に関するひどい話を知れば知るほどこの疑問は強くなるけれど、国や責任のある人たちは歴史や戦争責任をあいまいにしていくから、結局被害を受けるのは私達や子供たちの世代なのだなあと思った。戦争をするための法律が成立して、現在もしも有事になったとき、いったいどれだけの人がこの日本という国を守るために戦おうと思うのだろうか。どんな理由があってもこの国を守りたいと思うのだろうか。私は自分が日本人だと思っているけど、どんな理由があっても日本を守るため、平和維持のために、と自分で自分や家族や友達が戦争に参加するという事には絶対に賛成できないと思う。

今まで自分が日本人だという事はあたりまえの事だと思っていた。けれど沖縄の色々な人たちの話を聞いていく中で感じた事は、沖縄県は「日本」ではあるけれど沖縄人としての誇りがあり、沖縄県は日本の一部ではないという感覚を持っている人が多い事だった。地域の結びつきが強いと聞いた読谷村では特にそういう雰囲気を感じた。沖縄の離島に行った時もある島のオバアに、「あなたは日本からきたの？それとも本島(沖縄本島)からきたの？」と言われた事がある。はじめはこの事に違和感があったけれど、歴史などの背景を知っていくうちにそういう感情がある理由が理解できた。今回「美味しい、楽しい、不思議」な沖縄だけでなく様々な歴史と問題を持った沖縄を見る事ができた。過去にあった戦争の悲惨さ、現在ある軍事基地、これから作られる予定の更に進化した基地。

そしてその対極にあるような北山荘とじんぶん学校。「人間」として考えて、生きていく事を実感できる所は豪華なホテルではなく、そこにある海と森の中だった。海には、タコとカニもいてご馳走になりました。

豆腐のにがりも海から取れます。波の音と音楽や太鼓、きれいな星の空が、みんなの笑顔を作っていたような気がする。沖縄は、開発で自然が破壊され、陸も海も昔より汚れてしまったという。それでも空と澄んだ海とその海に沈む夕日が本当に綺麗だった。チャンプルーやそば、泡盛など食べ物も独特で、本当に魅力がたくさんあって大好きです。こんなに綺麗なところだけれど、今まで何気なく見て感動していた景色の一つ一つの中に、戦争の跡や日本政府の押し付け、自分の無関心さなど本当に色々なものを見てしまった気もした。

この旅の中で色々な人と真剣な話や楽しい話ができ、本当に充実した旅だった。沢山の人に出会い、様々なお話を聴く事ができた事は貴重な体験だった。これから勉強していく中で、この沖縄の旅で知った事や疑問に思った事は頭の片隅に置いておいて考えていきたいと思う。それから最後に、今回お世話になった方々と先生方、じんぶんのスタッフの皆様、旅の参加者に感謝します。みんなで楽しく過ごせる時間、笑ってられる時間が、私がこの旅で感じた平和です。

沖縄から平和を考える旅に参加して

変わるもの、変わらないもの

国際学科3年 西脇 裕美

私は、この旅で沖縄に初めて行きました。8月下旬の沖縄は、ぎらぎらと太陽の光が照り付ける日々が続き、海も空も例えようのない青さで、吸い込まれるような感覚のそれは広大なものでした。明かりのない浜辺に寝転んで見上げた満天の星空は、波の音とともに今でも思い出します。そのような自然の美しさや、生き生きとした生命の動きには圧倒されてしまいました。そして、旅の中で出会う沖縄の人々、過去の沖縄、今の沖縄、そして今回一緒に旅をした仲間と触れていくうちに、私の心は少しずつ変化していきました。

まず、初めて沖縄に行った私は、昔の沖縄を知ることから始まりました。戦時中住民の避難場所となったガマと呼ばれる洞窟に入りました。中はひんやりとし、懐中電灯無しでは歩けず、足場はかなり悪いところでした。そこを歩く私は、当時そこにいた人々の顔や体を踏んでいるような気がして複雑でした。黙祷をした時、私にはその一分間がどんなに長く感じたことでしょうか。息が詰まる思いでそこに立ち、沖縄戦中にいた人々の気持ちを想像しました。目を閉じても、開けても真っ暗な中、隣にいる人が誰なのか、生きているのか、死んでいるのか、自分の存在さえわからなくなる思いで、その間は鳥肌が止まりませんでした。当時は極限状態だったことを痛切に感じ取る事が出来ました。

そして現在の沖縄も知ることができました。それは、沖縄に点在する米軍基地です。軍用機の離着陸がとて多く、空を見上げれば飛んでいる軍用機が視界に入ってくるのです。基地で目の当たりにした軍用機の騒音はひどく大きく、静かな夜空にもその音は響いていました。基地のすぐ隣には人々の生活があり、車が走るその道路でさえ、緊急時の軍用機離着陸のために造られたというのです。基地と関わる生活を余儀なくされている、ということにも意識を向ける機会となりました。

そして、今の沖縄にとって新しいニュースといえばモノレールの開通

です。観光地としてますます変わりつつある沖縄の姿もそこにはありませんでした。

しかしその反面、変わらずに存在するものもあります。それは、沖縄の文化です。サンシンという沖縄の楽器や、音楽、沖縄の言葉、ゴーヤ - などの食文化は今も受け継がれています。人々はそれを愛し、誇りとしています。

また、沖縄で出会った方に言われた言葉でもあり、ある歌の歌詞の一部にもなっている言葉が胸に深く刻まれています。「泣きなさい 笑いなさい 悩みなさい」これは、今の私が忘れかけていたことかもしれません。真剣に悩むこと、心の底から泣くこと、大声で笑うことはいつしか忙しい日々の中で遠ざかっていました。

沖縄を知るということが旅の中心にありましたが、旅を終え、過去の歴史、変わり行く環境、受け継がれる文化という三つがつながり合い、今の沖縄があるのだと思いました。沖縄を知ったと言っても、まだ足を踏み入れただけなのかもしれませんが、この旅で「知ること」から始まり、それをきっかけに考えることも多くありました。

日本は守られているし、憲法第9条があるから戦争もおきない、と楽観的にとらえていた高校生のころの自分は、あまりに平和ボケをしすぎていて、他人事のようにしか考えていませんでした。

日本はどう守られているのか、一体誰に守られているのか、戦争を起こさない、戦争に加担もしない保障がどこにあるのだろうか。現在の日本を取り巻く安全保障の環境は変わりました。いつ戦争がおきてもおかしくない、日本はますます戦争という二文字に近づいているようにさえ感じます。沖縄へ行ってはじめてこの状況を危惧するようになりました。

これからの日本の担い手は私たち若者。日本の未来の平和を願い、祈る事も大切ですが、それは私たちの手で作るものだと感じました。一人ひとりが、激しい環境の変化に少しでも反応し、行動することからそれは始まるのかもしれないと考えるようになりました。

最後に、一緒に旅をした仲間と過ごした日々は、とても充実していました。一人参加での不安はありましたが、この旅で、新しい世界に自分から入っていくことの大切さを、改めて実感しました。

チャペル奨励集

生きる力を...

こころのありのままを聴きあう人間関係

細井 八重子

《マタイによる福音書 4章4節》

「人はパンのみにて生きるにあらず」という聖書の言葉があります。人は食べ物があって動物としての生命はつながっていても、それだけでは生きられない複雑な精神を持った生命体。その証とでも言いましょうか、ほんの些細なことと思われることで人は自ら命を絶つという行為があります。日本では現在、年間三万人の自殺者がでているそうです。それは交通事故で亡くなる人のなんと三倍です。

ついこの一週間の間にも、ネットで自殺を呼びかけて、お互いにそれまではまったく他人であった三人が車の中に練炭を持ちこんで亡くなりました。また、りそな銀行の会計監査をしていた公認会計士が自殺したことも報じられました。いずれも20代、30代という若さです。そして皆さんのような若い大学生の自死もけして少なくはありません。

また一方ではアルジェリアの地震で、崩れ果てた瓦礫の下から幼い少女が救出されました。たった一つの命を救うために懸命な努力を尽くしたことに、私どもはおおいに感動を覚えるものでもあります。

今日は、「生きるこころの力」について日ごろ私が考えていることを述べてみたいと思います。まず思うのは、生まれたからには生きようとする力が備わっているはずだと思います。それは本能です。その生きる本能がなんらかの精神的な痛手を受けて、崩される、あるいは衰弱することがあって、ついには自殺に至るということも起きてしまうことがあるのでしょうか。それはどんなときなのでしょう。なんらかの精神的な痛手と申しましたが、精神的な痛手を受けずに生きることは不可能でしょう。痛手は時とともに癒されることがふつうですし、たいてい人は苦悩のままに生きるのは苦しいので、何らかの発想の転換などを考え出して、その痛みから抜け出します。生きる本能は何か自発的な生きるすべを生み出す力を持っているように思います。人は自己治癒力というもの

を持っているとも言われます。

また、生きていくことの喜びはどんなときに感じられるのでしょうか。それは人によって違ふとも思います。それはちょっとした人生の秘密でありまして、一人一人がみつけ出さねばならない仕組みになっているように思います。カウンセラーである私は、「人は何のために生きるのですか？」という質問を受けるときがあります。こういう質問が出るときはたいていとでも難しい状況になっているときが多く、そのころは「私は生きる意味がわからなくなりました」、あるいは「生きる意味が見出せない」という場合が多いのです。ですので、たいてい私はすぐに応えられなくて、生きづらくなっている苦しさを感じ取ることに懸命になります。その人にできるだけ積極的な関心を向けていきます。

と言いますのも、いわゆる生きる意味の発見は、それぞれの心の内側から生まれるものであると言いつつも、そこに直接的、あるいは間接的に誰か人が介在していることが必要に思うのです。それは化学の実験で変化が起きるときに触媒の存在が必要であるようなものと言えましょう。生きることが非常に苦しくなっているときというのは、それまでの人生経験の中で、心の本能的なあり様 **こころのありのまま** を伝えきれない状況ができあがっているときに起こるのではないかと考えるのです。「こころのありのままを聴きあう人間関係」に恵まれなかったとでも言いましょうか。自分というものの存在を縦軸とすれば、「私はある人に理解されている」という感じと、「そして私はある人の心の支えになっている」といった関係性に生きていく横軸が必須だと思うのです。その関係性体験の導入としてカウンセリングが役に立つ場合もあります。カウンセリングが関係性体験の凝縮された場になれるといいとも思っています。

こんなことを思っていると、ある一人の四年生を思い出します。彼は四年生になった4月に学生相談室を訪れました。入学して三年が経ったのに取れた単位は四単位、あるサークルの人間関係の行き詰まりから、独りアパートで過ごす時間が多くなり、めったに外出はしないし、郷里にも帰っていない、このままではいけないと思いつつ結局は動き出せないで今日まで来たというのです。自分でも生きていくのか死んでいるのかわからない、無気力な気分からどうにも抜け出せないというのです。食べないでいればこのまま死ねるかと思ったりするというのです。そう

いう彼のありのままの心情を聴きとって一息ついたあとに「それで毎日どうしているの？」と質問してみました。積極的な関心を向けてみたのです。すると彼は気が向くと買い物に出たり、買い物といってもそれほどお金はありませんから、休憩室のあるようなお店などを見つけてはそこでぼんやり時を過ごす、あるいは図書館などに出かけて過ごしているということでした。話に来たその日の気持ちを聴きながら、週一回 50 分の時間を過ごして何ヶ月も過ぎた頃、彼は「銀杏の実を拾って、土に埋めて腐らせてその実を焼いて食べてみた」という話をしました。「生まれてはじめての体験で、本当に食べられるんだと嬉しくなった」と言うのです。嬉しくなったという話を聴いて、私も嬉しくなりました。嬉しくなった私を見て彼は、こんなことで細井が喜んでくれるならまた何か探してみようと思ったそうで、12月になったある日、この戸塚キャンパスの裏山にある道を散歩して、木に絡まる植物のつるを引き摺り下ろし、丸く編んで直径 30 センチほどのリースを作ってきました。そのリースは実にしっかりと丸めてありまして、しばらく相談室のドアに飾りました。私がびっくりして喜んでるのを、彼はにっこりして見ていました。そのあたりから彼は「世の中が変わって見えてきた、今まで何気なく見ていた景色はまるで無彩色であったが、今は光が射して色があるんだという風に感じる」と。

それからの彼は不思議と勉強に身が入るようになり、卒業して今は社会福祉の仕事に就いています。あのものぐさそうに見えていた彼が老人介護施設の職員となり、妄想を持った老人の話をよく聴いてあげたりしているそうです。そして彼が最近私を訪ねてくださったのですが、「いや、お年寄りのためというより、自分のためですよ。そうすることで今は自分が生き生きとしていられるんです」とまで言うのです。この彼には「人が人のために生きることができたときの力」に心から驚かされたものです。

このように「生きるこころの力」を獲得するためには、やはり自分の殻から一步抜け出し、自分の隣にいる人が「今日はどのような気持ちで、どんな考えで私の目の前におられるのか」話を聴いてみることから始まるように思うのです。

学生相談センター・カウンセラー
5月26日奨励

～ キリスト教週間「キリスト教の教派を超えて」より

東方正教会から見たキリスト教

長屋 房夫

今日はこの明治学院で「正教会について」というテーマで 25 分間お話しをする機会が与えられたことに感謝します。今回の話の内容を決めたとき、正教会(東方正教会、ギリシア正教会、オーソドックス・チャーチなどとも呼ばれる)の特徴を紹介するため、正教会の聖堂へ行くと必ず置いてあるイコン(聖画像)も持ってまいりました。正教会の特徴としてその他に典礼、聖歌、霊性、修道性などが挙げられます。今回ご要望に沿って、私も正教会の司祭としての正装をしています。また、アカペラで歌う正教会の聖歌を聴いていただくため、聖歌の CD も持ってきました。

正教会を紹介する場合には、その教勢数値を述べ、歴史的な成り立ちや、ローマ・カトリック教会やプロテスタント諸教会との教義的な相違を挙げて正教会を浮彫りにする方法もありますが、今日は少し異なった方法で述べてみたいと思います。

正教会の典礼の特徴、イコン(聖画像)、聖歌、霊性など、これらすべては「正教会の外面的な特徴」であります。正教会の本質だとは言えません。正教会だけではなく、まことのキリスト教の本質とは、外面的な特徴でもなく、もっと言うなら教義さえもキリスト教の本質だと言い切ることはできません。

まず、私たちが深く認識しなければならない現実とは、キリストが生まれてから二千年が過ぎキリスト教は変化したという事実です。それはローマ・カトリック教会、正教会、プロテスタント教会であれ同じであると言えます。キリスト教はその教義や信仰そのものに価値があるのではなく、その教えが実践されて初めて価値が出るのです。言い換えるなら、キリストの教え(誠め)が人々の生活から離れては、何の価値もないのです。キリスト教の正しい生活の中にキリスト教の本質が現されるのであり、そのために教えがあるとも言えます。

さて、日本人はある程度キリストの教えを知っているはずですし、ク

クリスマスが近づくと、日本人はみんな、こぞってクリスチャンではないかと思わせるほどの「にぎわい」になります。また全国に多くのキリスト教幼稚園、学校、大学、医療機関、老人ホーム、慈善活動団体があるにもかかわらず...周知のように日本人キリスト者の数は人口の割合に対して非常に少なく、キリスト教の歴史は五百年にもなるのに人口の1%に満たないのです。

日本にキリスト教が根付かない理由として、古くからの宗教や島国民族に特有な風土に根付いた土着信仰があるから、仏教的・儒教的なものの考え方が根付いているから、日本には天皇制があるから...などが挙げられますが、私にはその一つとして、キリスト教が正しく伝えられていないから、正しく理解されていないからではないか、との思いがあります。

キリスト教が他の宗教と根本的に異なる点は、キリスト教の人間理解にあると言えます。人間は「罪に傾いている存在」「心暗くなった存在」「病を抱えている存在」であり、ここからキリスト教の最も重要な教義が出ていて、これこそがキリスト教の本質にかかわることであり、他宗教との根本的な相違点と言えます。

キリストは神人であり、神のことは、神の子が受肉して、人間となって人類の病んでいる、死に定められている本性をご自分に受け入れて、苦難と死を通してご自分の中で人間の本性を復興(回復)・復活させる、と主張します。それまでは不可能であったが、この復興(回復)によってキリストを受け入れる者全員に「霊的な再生(再び新たに生まれること)の可能性」を与え、自分自身の中に「新たな生命の種」を受け入れる可能性ができたのです。これがキリスト教の本質であり、それはキリストの十字架上の犠牲によって成されたのです。キリストの受肉、十字架の死、復活はキリスト教にとって信仰の基盤です。

人間誰もが求めている「幸福」「善」とは、どんなものなのでしょうか。人間はこの幸せという黄色い鳥を霊体の全能力を費やして追い求めつつも、常に愚かな行為を続けているのが歴史であり、現状です。幸福のために罪を犯し、必ずいつかは死ぬことを知っているにも関わらず、空しく愚かなことに全力を注いでいます。あたかも無知な者のように法律を犯し、さらに神の誡めも犯しています。そのどこに人間の知恵があるのでしょうか？人間とは愚かで、無知な者だ、と言わざるを得ません。

誰もが「救い」を望んでいます。キリスト教は救いの方法や手段を具体

的に示さなければなりません。キリスト教は「まことの幸福がある」といい、生命の意義もあると教えます。ただ、明確にしておかなければならないことは、「生命は生命(キリスト)の中にしか意義を見出すことしかできず、死の中に生命の意義はない」と言うことです。キリスト教が永遠の生命を語る時、キリストが永遠の生命の源泉であると言いますが、それは神の国であり、人間の心の深みに「神の国はあなたの心の中にある」と教えます。

では、正教会とはどんな教会なのかを少しお話します。正教会はキリスト教の本質を教えと実践を通して守り続けていると自負していますが、正教信者でさえキリスト教の本質を理解していない人が多くいます。つまり洗礼を受け、教会へ通い、様々な典礼にあずかり、教会が教える様々な規則を守り、聖体拝領をし、告解をし、齋(ものいみ・節制)を行い、食事の前後や朝晩に祈りを唱えることで、自分を正しいキリスト者、義人であると見なすことです。正教会の重要な要素として伝統的な儀式、教えを律法学者のように理解すること、倫理・道徳を重要視する人々がいるのです。これらは救いを補助する手段であって、人間を直接に救うものではありません。

確かに、福音書には「すべて人にせられんと思うことは人にもまたそのごとくせよ」という黄金律がありますが、これと同じような倫理的な教えはキリスト教以前から多くの宗教や哲学者・思想家が唱え、教えていたことです。キリスト者は倫理を霊性へと高めなければなりません。この霊性なくしてはキリスト者の人生は単なる道徳的な人生で終わります。

正教会を深く理解する鍵は「霊性」にあると言えます。キリストが福音書で教える誡めを実践することによってキリストの犠牲を理解できるようになり、「まことの霊性」を獲得できるのです。霊性を得ることは神を自分の中に受け入れることで、これこそ最も重要なことで人間変容への始まりです。

キリストは「祈るときは戸を閉めて、一人で祈りなさい」と教えます。また使徒パウロスは次のように教えています、「すべての財産を売り、貧しい者に与えても、隣人のために命を投げ出しても、愛がなければ何の価値がない」と。キリスト教が教える愛とは「犠牲的な愛」であって、単なる愛ではありません。これから祈りと自己犠牲の必要性が説かれます。

キリスト教会はキリストの十字架上の犠牲を理解するための教えや

様々な手段を示しています。そしてキリストに倣って自己変革(変容)をしなければならぬ、と教えます。しかし、このキリストの十字架上の犠牲を理解するのは非常に困難です。二千年前にも「ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かなものです(コリントの信徒への手紙 1 章 23 節)」と使徒パウロは言っています。

もう一つ、キリストは私たちが理解する「倫理」の前に前例のない冒瀆を行い、非倫理的な事を認めた事実があります。最初に神の国に入った人はキリストと一緒に十字架にかけられた「強盗」でした。彼は何か倫理的な徳、善行を行ったのでしょうか？このような人を神の国に入れる宗教は他にあるのでしょうか？キリスト教は強盗を天国に入れる宗教、強盗に救いを与える宗教とも言えます。

キリストは「十字架の犠牲」においてキリスト教の本質を示しました。そして十字架の犠牲を受け入れるためには「霊の矯正」が必要であることを知らせたのです。ここで倫理性と霊性の相違が理解できません。倫理は霊性を獲得する一つの通過手段であり、正しい霊を得るため、神を受け入れる準備をするために必要なことです。倫理性が人間を救うのではありません。倫理性は正しい霊性を獲得する手段でしかないのです。この霊性を常に保ち、心に天国を獲得するための基盤として「祈り」と「節制」がある、と正教会は教えています。これが正教の修道性としてあらわされてきています。この修道性は、多くはありませんが正教会の修道院に、そしてまことのキリスト教信仰をもつ人々に見ることができます。

東方正教会司祭
10月20日奨励

プロテスタントの香り

金井 創

16世紀、カトリック教会に抵抗してプロテスタント教会は生まれました。いわゆる宗教改革です。ドイツのマルティン・ルターによって始められた改革はその後、さまざまな国で展開され、現代に続くプロテスタント教会の歴史がつづられてきました。この改革運動は何だったかという、それまで教会の権威が絶対的だったのに対して、聖書そのものにもどるべきこと、神と人との関係において大切なのは、人がどれだけ良い行いをするかではなく、信仰のみ、神の恵みのみが大切であることを主張した点にあります。

こうして現代では世界中にさまざまなタイプのプロテスタント教会が存在し、それを一言で特徴づけるのは難しいほどです。そこで、今回は日本のプロテスタント教会の歩みと特徴について話したいと思います。

日本のプロテスタント、キリスト教会の歩みは、おおまかに言えば明治期から始まっていますが、明治維新前からすでに欧米の宣教師たちは日本にやって来て活動を始めています。その道を開いたのは、1854年(安政元年)に結ばれた日米和親条約による日本開国でした。長い鎖国を続けてきた日本に対して西洋諸国の関心が高まり、開国と共に西洋のキリスト教会は次々と宣教師を派遣してきました。彼らが実際に日本の地に足を踏み入れたのは1859年(安政6年)ですが、実はその時に至っても国内でキリスト教が公に認められていたわけではありません。かつて鎖国を始めたきっかけともなったキリスト教禁止令がまだ生きていた時代なのです。

ですから、この時に来日した宣教師たちは公然と布教活動することができず、医療、英語塾などの働きを通じて浸透し、その影響下に集まった人たちにキリスト教信仰が伝えられていくというのが、最初の数年になされた伝道でした。プロテスタント・キリスト教は目新しい宗教として日本人の前に現れたというよりも、宣教師たちの人格、日本人に対する奉仕の姿、そして生き方に触れた人々が、彼らの人格を通してキリスト教に出会い、入信していく形で広まってきました。

宣教師たちは最初、指定された外国人居留地に落ち着き、そこから周辺に布教していきました。教会が設立されていったのは、こうした居留地が置かれていた長崎、函館、横浜、神戸、少し遅れて東京、大阪といった順になります。なかでも日本で最初のプロテスタント教会といえるものが誕生したのは横浜においてです。それは1872年(明治5年)に設立された横浜公会(日本基督公会ともいう)でした。今は「教会」という呼び名が一般的ですが、明治の初期にはこのように「公会」と呼ばれたのです。

日本で最初のプロテスタント教会が何を目指して形成されようとしていったか、横浜公会設立は、それを知る上で特徴的な出来事でした。この公会は宣教師たちの母体となった欧米の教派別の教会をまねようとはしませんでした。欧米ではプロテスタントの歴史上、さまざまな教派が生まれました。監督教会とか長老教会、メソジスト教会、バプテスト教会などです。そして普通は、その教派から派遣された宣教師によって教会が誕生するなら、当然それは同じ教派の教会になるはずでした。しかし、日本ではちがったのです。最初に公会設立に関わった日本人たちは、そうした教派の違いを超えてキリスト者はひとつとなり、基督への信仰だけによる一致を目指しました。そして宣教師たちもそれぞれの教派的背景を超えたところで、それに協力したのです。

ところが1873年(明治6年)のキリスト教解禁によって、欧米から教派を背負った新たな宣教師たちが次々に来日して宣教活動を始めたので、結局、日本にも数多くの教派別教会が誕生することになったのです。

こうして、諸教派が別々に活動を続けるようになったプロテスタント教会ですが、やがて大きな転機を迎えます。1931年(昭和6年)の満州事変以後、国家による宗教統制、キリスト教に対する圧力は次第に高まっていきました。キリスト教は敵国の宗教とみなされたのです。1939年(昭和14年)、帝国議会において「宗教団体法」が成立します。これはすべての宗教に対し、それぞれ国の許可を得たある一定規模の団体に一本化させていこうというものでした。

これによって日本のキリスト教会は、無教会主義とカトリック教会をのぞく、30以上のプロテスタント諸派と救世軍やYMCA(キリスト教青年会)、YWCA(キリスト教女子青年会)のような団体までも含めて一つの教団に合同することになりました。それが1941年(昭和16年)に創立された日本キリスト教団です。明治初期から日本の教会が一つであろうとした

内面的な要請は、その後も常に一方で意識されていたことですから、この教団設立には内から湧き上がってきた一致への機運が働いたことも確かですが、それ以上に戦時下の強力な宗教統制に縛られていった側面の方が決定的でした。

こうして日本では「宗教団体法」のもとに、三つのキリスト教団しか存続を許されないことになったのです。その三つとは、カトリックの「日本天主教教団」、プロテスタントの「日本基督教団」、そしてオーソドックス(正教)の「日本正教会」です。しかし、プロテスタントでは一つのまとめられた教団に、さらに国家からの圧力が加えられます。教団に合同した諸教派の中で、ホーリネス系といわれる諸教会に対し、教会の解散、牧師の逮捕、拘留という弾圧がなされたのです。これによって何人もの牧師が獄死、あるいは釈放後病死してしまいました。この圧力に屈服して、いやそれ以上に積極的に日本キリスト教団は、国家への戦争協力の度合いを深めていったのです。

1945年(昭和20年)、敗戦とともに日本の国家体制そのものも変えられていくことになりました。宗教界を統制した「宗教団体法」も実質的に効力を失っていきます。それに伴って、日本キリスト教団ではそこから離脱する教会、団体が相次ぎ、それらはもとの教派教会として、一団体としての活動にもどっていったのです。このことから、教団成立は諸教会の内面的一致の結果ではなかったことがわかります。ただ複雑なのはそうした旧教派のなかでも、離脱した教会と教団にとどまった教会とがあって、戦後の日本キリスト教団は多くの教派の中の一団体でありながら、中身は諸教派の合同教会であるという性格をもつようになったことです。

戦後、キリスト教は戦勝国の宗教としての新たな装いをもって、再び日本にもたらされました。また欧米の諸教会は敗戦によって痛めつけられた日本の各地に、さかんに援助の手を差し伸べてきました。そのようなキリスト教会の姿勢や日本の置かれた状態を背景に、価値観の空白状態にあった人々がキリスト教を受け入れ、また欧米文化の象徴としてとらえて入信する人も多く、ここに戦後のキリスト教ブームが生まれることになったのです。

戦後、新しい歩みを始めた日本キリスト教団は、こうしたキリスト教ブームという要因もあって、戦中の国家への戦争協力などについての反

省、責任について公にはなされないまま活動を展開することになったのです。そこで戦後20年あまりを経た1967年(昭和42年)、教団は「第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白」(いわゆる戦責告白)を発表しました。そこにはこう書かれています。

「『世の光』『地の塩』である教会は、あの戦争に同調すべきではありませんでした。まさに国を愛する故にこそ、キリスト者の良心的判断によって、祖国の歩みに対し正しい判断をなすべきでありました。しかるに、わたくしどもは、教団の名において、あの戦争を是認し、支持し、その勝利の為に祈り努めることを、内外に向かって声明いたしました。

まことにわたくしどもの祖国が罪を犯したとき、わたくしどもの教会もまたその罪におちいりました。わたくしどもは「見張り」の使命をないがしろにいたしました。心の深い痛みをもって、この罪を懺悔し、主にゆるしを願うとともに、世界の、ことにアジアの諸国、そこにある教会と兄弟姉妹、またわが国の同朋にこころからのゆるしを請う次第であります。」

そして、この戦責告白を空文化しないために、そこから具体的な課題を担う取り組みが始まったのです。また、明治学院でも1995年には「明治学院の戦争責任・戦後責任の告白」が敗戦50年にあたっての明治学院の自己検証として発表され、これは『心に刻む』と題した冊子になっています。

戦後のキリスト教会は再び教派に分かれて歩みを始めましたが、世界的に見るとこのように多くに分かれている状態を乗り越えていこうという動きが始まっています。プロテスタント教会の側では、1948年に世界教会協議会(WCC)が設立されて、世界各国の教会の間での対話を進めてきました。またカトリックの側でも、1962年から65年にかけての第二バチカン公会議の決議によって、こうした対話と試みに協力していくことが決められました。このような一連の動きをエキュメニカル運動(教会再一致運動)といいます。

日本でもこの運動はさまざまな形で、また地域でなされつつありますが、なかでも最も大きな出来事は聖書の共同翻訳であるといえましょう。カトリックとプロテスタントが共同で新しい日本語訳聖書を作ろうとい

う計画は、1969年に始まり1978年にその成果である『聖書 新共同訳』ならびに旧約聖書続編が完成しました。現在、カトリック教会と多くのプロテスタント教会やキリスト教学校で使用されているこの聖書は、教会再一致への望み、対話の証しとして作られたものなのです。

学院牧師
10月21日奨励

アングリカン・チャント

聖公会における礼拝の伝統

木田 啓介

1．聖公会の礼拝の特徴

聖公会という教派は一言で言えば、カンタベリー大主教との交わりの内にある教会の事です。聖公会の事を英語では、アングリカン・コミュニオンと言います。聖公会の特徴と言えば、先ず第一に祈禱書を用いて礼拝を行うという事が挙げられます。英国では1534年、ヘンリー8世の時に首長令が出され、聖公会とローマ・カトリック教会は分かれました。その後1549年、エドワード6世の時に統一令が出され、聖公会は祈禱書を用いるようになり、それまでラテン語で行われていた礼拝が、自国語の英語で行われるようになりました。祈禱書には朝の礼拝と夕の礼拝という、毎日行われる二つの礼拝があります。これは、当時修道院で毎日8回も行われていた祈りを、トマス・克蘭マー大主教が、一般の信徒も祈れるようにと、そのエッセンスを抽出して朝と夕の2回にまとめたものです。今回は祈禱書にある礼拝の中から、夕の礼拝に焦点を当てたいと思います。

2．信仰生活における詩編の重要性

夕の礼拝の中では、詩編の朗読或いは歌唱が重要な位置を占めています。何故なら詩編は、初代教会以来、常にキリスト者たちの信仰生活を育み、霊的成長を助けてきたからです。聖書には、「詩編と賛歌と霊的な歌によって語り合い、主に向かって心からほめ歌いなさい。」(エフェソの信徒への手紙5章19節)という言葉や、「詩編と賛歌と霊的な歌により、感謝して心から神をほめたたえなさい。」(コロサイの信徒への手紙3章16節)という言葉があります。また古代教会で活躍した有名なヒッポの主教アウグスティヌスは、その著『告白』の中で次のように言っています。「わたしはあの『詩篇』を誦してどんな叫びをあげたことだろう。それによってどんなに熱烈にあなたにむかって燃えたたされたことであ

ろう。熱心のあまり、できることなら、全世界に人類の傲慢に対して、『詩篇』を誦することを熱望したほどである。しかも、『詩篇』はじっさいに全世界にうたわれ、その熱を受けないものはないほどである。」(アウグスティヌス『告白』9巻4章より)

このように、詩編はキリスト者の信仰生活にとって、非常に大切なものです。私は次に、夕の礼拝で行われるこの詩編の歌唱について、聖公会で行われてきた伝統を紹介したいと思います。

3. 聖公会の伝統 “ アングリカン・チャント ”

詩編を歌う伝統は初代教会からありますが、聖公会はローマ・カトリック教会と別れてから独自の発展をしてきました。聖公会がまだローマ・カトリック教会と分かれていなかった頃、即ち中世において、詩編はグレゴリアン・チャントと呼ばれる音楽で歌われていました。グレゴリアン・チャントの歌詞はラテン語であり、その旋律はラテン語の発音構造によく合ったものでした。グレゴリアン・チャントの特徴としては単旋律であることが挙げられます。

しかし聖公会がローマ・カトリックと別れた後、礼拝がそれまでのラテン語から英語に代わったことにより、詩編の歌唱は変化していきました。16世紀の中頃から英国の作曲家たちは詩編の旋律に和声をつけ始め、17世紀後半に、今あるアングリカン・チャントと呼ばれるものの基礎が完成しました。アングリカン・チャントの歌詞は英語であり、その旋律は英語の発音構造に合うように工夫されています。アングリカン・チャントの特徴としては、単旋律ではなく混声(男声)4部であることが挙げられます。

さてアングリカン・チャントを伝統的な形で歌う団体として、英国の大聖堂聖歌隊というものがあります。英国の主要な大聖堂では、毎日の夕の礼拝における詩編を、大聖堂付きの聖歌隊が歌う伝統があります。この聖歌隊は専門家集団ですが、英国ならではの特徴があります。それは、ソプラノのパートを変声期前の少年たちが歌い、アルトのパートをカウンター・テナーと呼ばれる裏声の成人男性たちが歌うという事です。この聖歌隊編成の伝統は英国だけに見られるもので、歌声の響きは透明感に溢れ、輝きのある美しいものです。今回は、この英国の大聖堂聖歌隊が歌うアングリカン・チャントを実際に聴いてみたいと思います。歌

われる詩編は第8編で、演奏はロンドンのセントポール大聖堂聖歌隊です(CD: “ Psalms from St Paul's ” Psalms1-17のトラック8番、製造元とCD番号:Hyperion CDP11001)。

次にアングリカン・チャントの楽譜について説明したいと思います。手元にある楽譜(*The New St Paul's Cathedral Psalter*, The Dean and Chapter of St Paul's より pp.11-12)を見ると、上に楽譜、下に詩編8編の英語歌詞がある事が分かります。これは下の歌詞を上楽譜で歌うという事なのですが、どのようにすれば良いでしょうか。この問いを解決する鍵が英語歌詞に度々現われる色々な記号です。この記号の事をポイントティングと言います。各々の記号は、歌詞の楽譜における位置を示します。即ち“?”は小節線を、“・”は小節中の2分音符と2分音符との変わり目を、“:”は複縦線或いは終止線を示します。尚、“ ”はブレスを取る位置を示しています。また長い音を持続する部分、即ち1小節目の全音符、4小節目の付点2分音符、8小節目の全音符、11小節目の全音符をレシテーションと言い、音が変化する部分、即ち2~3小節目、5~7小節目、9~10小節目、12~14小節目をエンディングと言います。

アングリカン・チャントは7小節で一区切りとなっています。この7小節の音楽だけを繰り返して詩編を歌うアングリカン・チャントの事をシングル・チャントと言います。しかし手元にある楽譜では全部で14小節となっています。これは7小節の音楽が二つ組み合わされて一つのアングリカン・チャントとなっているためです。このように7小節二つ分、合計14小節の音楽を繰り返して詩編を歌うチャントの事をダブル・チャントと言います。また稀な例ですが、7小節三つ分、合計21小節のトリプル・チャントや、7小節四つ分、合計28小節のクワドルプル・チャントというものもあります。

以上、簡単ですが聖公会における詩編歌唱の伝統、アングリカン・チャントについて紹介させて頂きました。

聖公会神学生 / 上智大学大学院生
10月24日奨励

見捨てられてはいない

下里 綾子

《詩編 146》

私は矯風会事務局に週三日勤めながら、矯風会ステップハウスの宿直ボランティアとしても関わらせていただいております。矯風会は 1886 年(明治 19 年)に設立された女性の社会活動団体です。初代会頭は矢島楯子といます。矯風会は他のさまざまな団体と力を合わせて、かつては婦人参政権運動や、廃娼運動等を続けて参りました。廃娼運動に一生をささげた久布白落実(クブシロオチミ)という、矯風会でビッグな方もおられますが、今日私は地方(島根県)に住んで、矯風会の活動とともに担ってこられた多田さや子さんの若い頃のことをまず、お話ししたいと思います。

さや子さんは 1910 年に、当時日本の植民地であった朝鮮の平壤で生まれました。私たちは生まれるにあたり、どんな時代、どんな所、そしてどんな親のもとに生まれるかを選ぶことはできません。その時、さや子さんの父親の商売は「貸座敷業」、つまりその当時は、女郎屋と呼ばれた遊郭のオーナーだったのです。それは若い女性達を前借金で売買して売春をさせ、それでお金をもうける商売です。さや子さんは友達から「あなたの家の商売はなに？」と聞かれはしまいかと、いつもびくびくしていたといます。「私はどうしてこういう所に生まれてこなければならなかったのだろうか」と運命ともいえるべきものへの、納得できない怒りのようなものや悲しみをもったまま、さや子さんは成長したのです。

さや子さんがクリスチャンになる前 18 歳の時に、お店に「小菊」という女性がおりました。廊下でばったり出会った小菊さんが「さや子さん、学校を出られたら、私たちのような者がいなくなるためにどうか尽力してくださいね。」と言われたそうです。このさりげない一言はその後、折に触れて鮮明に浮かび上がり、「私たちのような者」という短い言葉のなかに込められている重い意味、鋭い問いかけ、強い訴えがさや子さんの心を揺さぶりつづけることになりました。

そんな彼女がある日、玄關に入ろうとして、投げ込まれていた新聞に何気なく手を伸ばすと、そこに「盲人哲学者、岩橋武夫氏講演」と出ておりました。彼女の目はそこに釘付けになりました。「盲人」で「哲学者」、このコントラストが彼女の心を強く捕らえたそうです。

岩橋先生は、早稲田大学の理工学部にて在学中、突然失明し、世をはかなんで自殺しようとした時、母親の「なんでもよいから生きていてくれ」の一言で我に返り、生き抜こうと決心したそうです。やがて聖書を読み、キリストの愛に触れ、盲人となってもなお大きな使命があることを悟るのです。関西学院には妹さんに助けられながら通学し、結婚してからはイギリスのエジンバラに留学。そこで経済的ピンチに直面しました。先生は「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えられるべし。」(マタイによる福音書 6 章 33 節)という聖書のみ言葉を信じました。すると誰が置いていくのか、毎朝一定の場所にパンが置かれていたというのです。さや子さんはここまで話を聞いたとき、感動のあまり涙をぬぐうことができなかつたそうです。そしてこの盲目の、希望など持てそうにない不幸な人から“人間は宿命観に負けてはいけない。使命観に生きよ”という力強い声を聞きました。のろわれた暗い鎖縄から切り離された彼女は、教会に行くようになり、まもなく 1931 年(昭和 6 年)12 月に洗礼を受けたのです。

さや子さんはある日、暗い部屋の片隅に若い女の子が、粗末な蒲団にくるまっているのを見ました。側によって声をかけると、「わたしにはもう何の希望もありません」と言われ、返す言葉がなかつたそうです。自分は今、明るい希望に燃えているのに、この女性には何の希望もないとは、何という違いだろう。さや子さんは勇気を出して父親に言いました。「お父さん、お願いします。どうかこの商売をやめてください。」しかし父親は「政府公認の商売をつづけて何が悪い、お父さんは多額の税金だって納めているのだ。親のすねをかじる身分で、親の商売の批判をするなど、もつてのほかじゃ。」父の言い分にも一理ありました。

彼女は罪の償いに、少しでも気の毒な女性達の役に立ちたいと願うようになり、病気でふせっている人があれば、枕辺を訪れ見舞いました。外出したい人がいれば一緒にでかけました。このように自分に出来る限りのことをし、彼女たちの味方になってやったのです。このころから、人権問題を訴えた『女工哀史』の本が読まれ、社会の不平等や貧富の差

への批判が世論となり、社会主義運動のうねりが植民地にも及んできたのです。このころキリスト教婦人矯風会では、東京に久布白落実、大阪に林歌子といった人たちを中心に、娼妓運動が盛んに行われていました。また厳しい迫害にあいながらも救世軍による救援活動も続けられていました。

それから 1956 年(昭和 31 年)になって、長い間の念願だった「売春防止法」がついに成立したのです。けれども法制度の充実と強化だけで売春が一掃されたかということ、それはそう簡単なことではありませんでした。ちなみに矯風会の冊子『婦人新報』2003 年 6 月号のタイトルは「人身売買 “ 私たちはモノではない ” 」となっています。今も続く重たい現実を、皆さんはどのように受け留められるでしょうか。

今日お読みいただきました詩編 146 編は、矯風会の活動を支えている御言葉でもあります。ここはハレルヤ詩編といわれ、神の救いへの賛美の歌なのですが、3 節には「君候に依り頼んではならない。人間には救う力はない。」とあり、私たちは人の力を究極により頼んで生きるのではなく、真に頼るのは神のみであること、たとえ地位の高い君主も、しよせん人間にすぎず、真の救済力を持っていないことを教えています。5、6 節には「いかに幸いなことか ヤコブの神を助けと頼み、主なるその神を待ち望む人」、ここでは天と地と海と全てをつくられた創造主なる神様に信頼し、待ち望む人の幸いを告げています。7～9 節以下には「主は虐げられている人のために裁きをし、飢えている人にパンをお与えになる。主は捕われ人を解き放ち、主は見えない人の目を開き、主はうずくまっている人を起こされる。主は従う人を愛し、主は寄留の民を守り、みなしごとやもめを励まされる。しかし主は、逆らう者の道をくつがえされる」。ここで神様は社会正義と密接に結びつけられています。神様は抑圧され、差別され、人権をふみにじられて小さくされてきたどんな人をも見捨てずに、心に留め、しっかりお守り下さいます。そして神に従う人を愛してくださり、とこしえにまことを守られる神様は正義を行い、逆らう者の道をくつがえされるお方でもあるのです。詩編 146 編の御言葉は、矯風会のさまざまな土台となって、女性の家 HELP や、ステップハウスの働きが今日もつづけられています。

日本キリスト教婦人矯風会スタッフ
6 月 20 日奨励

～ 「キリストと女性たち」より

あなたの信仰があなたを救った

羽野 眞理耶

《マルコによる福音書 5 章 25 - 34 節》

本日の礼拝では「キリストと女性達」をテーマに“直接キリストと係った女性” 或いは“キリスト教と係った女性” のいずれかを語るようにとのご指示でした。

“キリスト教に係った女性”は大変興味ある題材で、すぐさま私は日本の、或いは海外の魅力あふれるキリスト者女性の名前をあの人この人と思いつくかべましたが、本日は敢えて“主イエスキリストと直接係った女性”を考えてみることに致します。

主イエスと係った女性として、真っ先に思いつくのはマリヤの名前を持つ女性達です。新約聖書には六人のマリヤが登場します。主イエスの母マリヤ マグダラのマリヤ マルタの妹で静かに主イエスの聖言葉に耳を傾けるマリヤ 十二弟子に数えられるヤコブとヨハネ兄弟の母マリヤ ヨハネと呼ばれるマルコの母マリヤ(この女性の家が最後の晩餐の会場と推定されます)、そして六人目のマリヤは主イエスキリストの復活、昇天の後になります。使徒パウロがローマ人への手紙 16 章の中で「あなたがた(ローマの信徒)のために非常に苦労したマリヤによるしく」と個人的な挨拶の中で登場します。

さて、先ほどの聖書の箇所(マルコによる福音書 5 章 22 - 24 節)には、会堂長であるヤイロという人の娘が死にそうだったので、主イエスに助けを求めて治った様子が書かれています。多くの群衆に紛れて、主イエスの衣の端にそっと触れて、長患いから解放され癒された女性に、主イエスは 34 節「あなたの信仰があなたを救った」と言われたのです。

私が、この御言葉に出会ったのは、もうかれこれ 50 数年も前のことでした。当時使われていた文語体の聖書では「汝の信仰、汝を救えり」とありました。このたった一言「汝の信仰、汝を救えり」の聖句には、中学生だった私の魂を揺さぶり、強いインパクトを以って胸に迫るものであった事が忘れられません。

復活のリアリティ

吉野 一

《コリント信徒への手紙 15章 20節》

しかし、実際、キリストは死者の中から復活し、
眠りについた人たちの初穂となりました。

復活のリアリティについて聖書から学びたいと思う。

聖書の語り伝えてきた福音のもっとも重要な部分の一つに「復活」がある。イエスは十字架の刑によって処刑された後、三日目によみがえったと伝えられている。またイエスを信じる者は、終わりの日に、イエスがよみがえったのと同様に、よみがえることができると聖書は伝えている。この復活こそが、人々をして聖書に向かうことをなさしめ、またキリスト教に魅力を感じさせる最大の要素である。

生けるものは必ず死ぬ。如何なる例外も存在しない。人は全て一度は死ぬ。否、一度しか死なない。死んだ後にもう一度人生を体験するチャンスなどない。したがって、二度と死ぬ必要はないのだ。一度死んでしまえば、それで終わりである。終わりと言え、死は全ての終わりである。たんにその人の肉体の終わりであるばかりでなく、世界の終わりである。人は、意識があって初めて世界があることも認識できる。死んでしまえば、世界はない。それこそ本当の無である。こう考えると、底知れぬ恐怖が沸き起こる。死の恐怖である。

死の恐怖が人をして宗教に救いを求めさせる。死人がよみがえるのであったら素晴らしい。しかし、復活は信じるのが容易ではない。しかし、聖書によれば、復活を信じることができなければ救いもない。したがって、復活もない。われわれはどうして復活を信じることができようか。本当に死者が復活するのか。

イエスの死と復活からそれほど経っていないパウロの時代にも、すでにそのような疑問を抱く人たちはいた。コリント信徒への手紙 15章

この聖書の出来事はマルコによる福音書のほか、マタイによる福音書9章、またルカによる福音書8章にも見ることが出来ます。この他、主イエスが病人を癒された出来事は聖書の中に沢山書かれています。今回、私は丁度よい折と思い、ざっと数えて見ますと、四つの福音書に重複する記事を除いて22箇所ほど挙げる事が出来ました。更に、その癒しは個人的なものだけでなく、複数の病人を、また或る時はおびただしい病人を一度に癒された場面もありますから、イエス様に病気を治していただいた人の数は相当数に及んだと想像されます。

近頃の流行り言葉に「癒す」「癒される」がありますが、「癒し系の音楽」「癒し系の住空間」「癒し系の色彩」は理解出来ても、「癒し系の顔立ち」に至っては、やれやれ、そこまで言うかとなってしまいます。本来「癒し」とは病気を治す、渴きを潤す、などに用いられる言葉なのです。

さて、二千年前頃のイスラエルの世界では、病気とはサタン(悪魔)に縛られ、取り憑かれている状態を指し、それは罪と同一視されるものでした。従って、主イエスが病人を癒される行為は人間の業を超越した、父なる神から与えられた奇跡の力を以って病気を治されると同時に、病気の根源とも言うべき罪を赦し、更に救いを与えられることであります。

先ほどの聖書の話に戻りますが、その女性は12年もの長い間、出血が止まらない病に苦しみ、医者に全財産を投じても見離されてしまい、ますます病状が悪化して不治の状態に在ったのです。その様な状況に在ってさえ、女性は真正面から積極的に主イエスに向かって「私の病気を癒して下さい」と願い出たのではありません。多くの群衆に紛れて、後ろからそっと主イエスの衣に触れた、この娘の行為に注目しましょう。女性の判断の前提として、主イエスキリストなる方の本質、即ち人々の罪を赦す権威を神から与えられた救い主「メシア」であることを認識し、信じて疑わなかったことがあります。それ故に主イエスは「あなたの揺るがぬ信仰が、あなた自身を救った。」と言われたのです。

私共も、この女性の様に主イエスが私共一人一人の罪の贖い主である事を確信して、イエス様から「あなたの信仰が、あなたを救った」と言って頂ける者でありたいですね。

学院理事
6月19日奨励

12 節(今日の聖書の箇所(少し前))でパウロは次のように言っている。「キリストは死者の中から復活した、と宣べ伝えられているのに、あなたがたの中のある者が、死者の復活などない、と言っているのはどういうわけですか。」キリストが本当によみがえったかどうかは、非常に重要な、決定的な問題である。

パウロは続いて述べている。「そして、キリストが復活しなかったのなら、わたしたちの宣教は無駄であるし、あなたがたの信仰も無駄です。」(14 節)。続いて 17 節「そして、キリストが復活しなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今なお罪の中にあることとなります。」パウロの言うとおり、もしキリストが本当はよみがえられなかったのに、よみがえったと単に希望を抱いているに過ぎないのだったら、クリスチャンはあわれむべき存在であろう。

「しかし」パウロは断言する(20 節)「実際、キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となりました。」

パウロはこのことを最も大切なこととして、彼自身も体験したところの、まごうことなき真実として、私達に伝えようとしたのである。すなわち、3 節以下「最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたものです。すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおりわたしたちの罪のために死んだこと、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおり三日目に復活したこと、ケファに現れ、その後十二人に現れたことです。次いで、五百人以上もの兄弟たちに同時に現れました。そのうちの何人かは既に眠りについたにしろ、大部分は今なお生き残っています。次いで、ヤコブに現れ、その後すべての使徒に現れ、そして最後に、月足らずで生まれたようなわたしにも現れました。」

マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四福音書にもイエスの復活に関する記事がある。すなわち、マタイによる福音書 28 章 1 - 20 節(ガリラヤの山で 11 人の弟子に現れた)、マルコによる福音書 16 章 1 - 19 節(マグダラのマリヤに墓の前で現れ、その後 11 人の弟子達が食事をしているときに現れた)、ルカによる福音書 24 章 1 - 53 節(エマオの途上のふたりの弟子に現れ、その後 11 人の弟子達に現れた)、ヨハネによる福音書 20 章 1 - 22 節(マグダラのマリヤに墓の前で、弟子立ちに家の中で、その後、ティベリアス湖畔で 7 人の漁をする弟子達に御自身を現された)である。そこでは、復活のイエスが現れたさまが詳細に記されている。

諸君、その中で一箇所だけでも開いて読んでいただきたい。

例えば、ルカによる福音書 24 章 13 節以下。この箇所は、読んでいくとイエスの現れたさまが実にリアルに描かれているので感銘を受ける。エマオへの途上で、イエスが二人の弟子達に現れた。最初はイエスだと気付かなくて話していたが、福音についてイエスがその弟子達に説き明かされていった。そして目指す村に近づいたとき、二人がイエスに「どうぞ一緒にお泊まりください」と言って、無理やり一緒に泊まるようお願いした。イエスは、食事の時にパンを取り讃美の祈りを唱えてパンを裂いてお渡しになった、すると二人の弟子にはそれがイエスだということが分かった。二人は、道でお話ししておられるとき、又聖書を勧めてくださったときに、私達の心は燃えたではないか、と語り合ったということである。この箇所を読む度に、あたかも私達はその場に居合わせたかのように、よみがえりのイエスが二人の弟子と話し合われている様子が見えてくる。

パウロ自身に復活のイエスが現れたときのことは、使徒言行録 9 章 1 - 9 節に記されている。パウロ(サウロ)は「ところが、サウロが旅をしてダマスコに近づいたとき、突然、天からの光が彼の周りを照らした。サウロは地に倒れ、『サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか』と呼びかける声を聞いた。」(3 節)のである。簡潔だがリアルな表現である。これが、イエスの弟子たちへの弾圧の急先鋒にいたパウロが劇的な改心をとげることとなったイエスとの出会いである。

このように聖書は復活したイエスの現れたさまをいろいろな箇所で伝えている。それらは、イエスの復活に関する証言の記録である。コリント人への手紙の先ほどの箇所にも「大部分は今なお生き残っています。」とあるように、パウロがその手紙を書いた時点では、よみがえりのイエスを見た人たちがまだ多く生きていて、イエスの復活を証言していたのである。パウロ自身も復活のイエスとの出会いを証言している。当時は、人はもしイエスの復活について疑問を抱けば、いつでも復活のイエスを体験した人たちに会って直接その証言を聞くことができたのである。そうした証言の中の幾つかは書き留められ、歴史の時間の進行にも風化することなく、今日に至るまで伝えられてきている。それが、新約聖書、この聖書なのである。

人は自ら全ての出来事を体験することはできない。現在の時点におい

ても世界の各地でいろいろなことが事実として起きている。それを知るのには、その事実に関する報道を信じるほかない。ましてや、過去の歴史的事実に関してはいっそうそうである。

諸君は聖書に書かれているこの証言を信じるか、それとも疑うか。もしどうしても判断しなければならぬとしたらどちらを選ぶか。実際、諸君は決断を迫られているのである。

この証言が偽証でなかったなら、証言は真実を述べているのであり、イエスの復活は事実としてあったのである。聖書の証言が偽証であることがあるか。使徒達が偽証したとは到底思えない。もしそうであったら、彼らは神に反する証言をしているのである。すなわち、コリント信徒への手紙 15 章 15 節「更に、わたしたちは神の偽証人とさえ見なされます。なぜなら、もし、本当に死者が復活しないなら、復活しなかったはずのキリストを神が復活させたと言って、神に反して証をしたことになるからです。」神を述べ伝えようとする者たちが、神に反する証言をするとは考えにくい。ましてや、その証言によって、彼らは苦難を背負い、殉教の死をとげることになるのにパウロやペテロもそうであった、敢えて偽りを述べることは考えられないのである。偽証とみることができない以上、われわれは、聖書に伝えられたイエスの復活に関する使徒達の証言を信じるほか道がない。イエスがよみがえったのは事実なのである。

ひところ世情を騒がしたのはオウム問題である。先般、新聞に「松本被告の公判結審、最後まで語らず。来年 2 月 27 日判決」という見出しの下、オウム裁判に関する記事が出ていた(朝日新聞 2002 年 11 月 1 日朝刊)。それによると、「殺人罪などに問われ死刑を求刑されているオウム真理教元代表松本智津夫(麻原彰晃)被告の公判が、31 日午後東京地裁で結審した最後に、被告に意見陳述の機会が与えられたが、黙して語らなかった。判決は来年 2 月 27 日午前 10 時に正式に指定された。」松本被告は地下鉄・松本サリン事件、坂本弁護士殺害事件など 13 事件で 27 人を死亡させたとして起訴されている。この日、午後の法廷では、一連の事件で最大の死傷者を出した地下鉄サリン事件について弁護側が弁論を展開し、その中で、警察の強制捜査が迫って危機感を抱いた故村井秀夫元幹部と井上嘉浩被告が共謀したもので、被告が指示したことはないとの否認、事件二日前に松本被告と弟子達が乗ったリムジンの中で事件の謀議があ

ったとする井上被告の証言も虚偽だと主張した。そして最後に、事件の真相が分からないのは被告が黙っているからではない、宗教活動をはじめ調べるべき基礎的な事実を全部切り捨てて、事件の筋書きを捏造した検察・警察の責任であるということを述べて、のべ二日間に亘った弁論を締め切った。

諸君、松本智津夫は、検察側の主張どおり本当に地下鉄サリン事件を指揮し、その共謀共同正犯として有罪なのであるか。それとも弁護側の言う通り、彼の弟子達が勝手に行ったもので、無罪なのであるか。

真実は神のみぞ知る、事実がどうであったかは、われわれ人間は証拠・証言によって判断する他ない。証拠としては、上述の井上嘉浩被告をはじめ、多くの証言が、松本被告の指示による犯行であると言っている。これらの証言が真実を述べているなら、松本被告は実際犯行を指令したのであり、有罪と判決すべきである。しかし、証言が事実を述べているのでなければ、有罪とすべきでない。この事件については、私たちは松本はやっただけに違いないと思っている。それは新聞報道を通じて紹介された色々な証言を私たちが信じているに他ならない。

イエスの復活に関する証言と、その松本の有罪を証明する証言と比較するのは神様に対して恐縮であるが、あえて言わせてもらおうと自ら罪を犯した刑事被告人たちの証言を信じるのが有り得ても、ヨハネやパウロなどの使徒たちの証言を信じ得ないというようなことがありえようか。なかには次のように反論する人がいるかもしれない。「この事件は現在の出来事であり、証人は生きている、これに対してイエスの復活は二千年近くも前の出来事であり、パウロやヨハネはとっくに死んでしまっている。」確かに二千年の歳月は大きい。しかし、それだけの期間を経てもなお証言として生き残ってきたということは、その証言の持つ力、真実性がかえって裏付けるのではないであろうか。それに、聖書が書かれ、パウロのコリントの信徒への手紙が書かれた時点においては、まだ多くの人達が生きていたので、疑問を持つ人は、その証人達に直接確かめることが出来たのである。もし聖書の証言が偽りであったら、聖書の記事はその時点で否定され、後世には伝えられることはなかったはずである。

いずれにせよ、人は全てを実際に体験することはできない。出来事についての証言を元に、その真実性を判断するしかない。要は証言の信憑性にかかっている、証言を信頼するか否かにかかっているのである。

キリスト教と社会権

蛭原 健介

《マタイによる福音書 19章 16 - 22節》

皆さんこんばんは。法学部教員の蛭原と申します。専門はフランス法です。2000年の4月に明治学院大学に着任しました。以来、3年半ほどになりますが、今回はじめてチャペル奨励の機会を与您いただきました。

さて、今週の奨励のテーマは「律法学者からのメッセージ」となっています。私はフランスの社会権の歴史や思想に興味をもちながら研究を進めていますので、今日はそのような視点からお話いたします。

憲法の歴史をふりかえってみますと、まず自由権が憲法上の権利として確立され、その後で社会権が保障されるようになります。フランスでも、まず近代市民革命の主体となった、財産と教養をもつ「ブルジョワジー」が封建体制を打倒し、自由な経済活動を求めるスローガンとして「リベルテ(自由)」が主張されました。他方で、社会的・経済的な弱者にとっては、「リベルテ」が実現されるだけでは不十分でした。契約自由の原則は、安く労働力を確保したい使用者にとって利益をみちびく一方、使用者に対して弱い立場にある労働者たちは、たとえどんなにつらくても、長時間・低賃金労働を受け入れなければ、生活していくことができなかつたのです。19世紀のフランスでは、労働者たちは劣悪な労働条件を強いられた結果、その生活は悲惨で、平均寿命は著しく低下した、といわれています。「リベルテ」は結局のところ、経済的強者のためのものであって、貧しい人々にとっては、貧乏の自由、あるいは、空腹の自由にすぎなかつた。そこで、社会的・経済的な弱者にもやはり「人間らしい生活を保障すべきである」ということが主張され、また、そのような生存の保障が今日では国家の義務となり、国家は「レッセ・フェール」(自由放任)ではなく、積極的に介入することを求められました。こうして20世紀以降の憲法では生存権をはじめとする社会権が保障されています。皆さんもご存じのように、日本国憲法も25条1項で「すべて国民は、健康で文化

私は、二つのケース、すなわち、聖書の証言と裁判の証言を比較した。両者に共通するのは、その証言によって自分に不利な結果をもたらすことがあっても、すなわち、そのことにより罪が重くなるということはある、あるいは迫害の困難を招くことがあっても、あえて証言した点である。だから私たちがその証言に偽りはないであろうと判断する。それは論理的推論の結果である。もう一つは直感による。裁判官は証人の証言を聞いて本当のことを言っているのか、それとも嘘を言っているのか、直感によって判断する。その直感は証言の筋からおのずと作り出される。歴史的文献を読む場合でも、このことは当てはまるのではないであろうか。聖書を読むということは証言を聞くということと等しい、ちょうど裁判官が証人の証言を聞いて、それが真実を述べていると直感するように、聖書の証言の中から私たちは証言の真実性を直感することができるのである。聖書を読んでいけば、おのずとイエスの復活に関する証言は、偽りの証言ではない、偽証ではなくて、真実の体験を述べたものであるということが伝わってくる。そしてそれは、イエスの復活のリアリティを伝えてくれる。

先ほど挙げたルカによる福音書のイエスの復活に関する記事を、もう一度見ることにしよう。それは、エマへの途上での出来事である。イエスと語り合った二人の弟子は、イエスを家に泊めて共に食事をした。「一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。二人は、『道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか』と語り合った。」(ルカによる福音書 24章 30節)

聖書を読むときに、私達はイエスの言葉や使徒たちの多くの証言を聞くわけである。そしてその証言を聞くとき、私達は心の内が燃えるのを感じる。それによって、私達は聖書が語る記事が真実であることを直感するのである。

法学部教授
11月25日奨励

的な最低限度の生活を営む権利を有する」と定め、これを具体化するために生活保護法などの立法が制定されています。

このように弱者にも人間らしい生活を保障しなければならない、という発想は、実は結構古くからありました。有名なのは、フランス革命期の1793年憲法の人権宣言にある「公的救済は、神聖な義務である。社会は、不幸な市民に対して労働を確保することにより、または、労働しえない者に生活手段を保障することにより、その生存について責務を負う」という規定でしょうか。さらに遡ればフランス革命前の文書にも、国家や社会が貧しい人びとを救済する義務を負う、といった表現をみることができます。

しかし、それ以前になるとフランスでは貧しい人々の救済は、キリスト教の慈善活動と密接に結びついています。ここではフランスでよく知られているヴァンサン・ド・ポールについて、簡単に触れておきたいと思います。彼は、1581年にフランスのガスコーニュ地方の農家に生まれ、その後17世紀に入ってから、カトリックの布教と慈善活動に専念します。当時のパリでは、多くの赤子が市内に捨てられていたようです。教会の門の前に置かれた「かご」のなかに、赤子を捨てるようになっていて、子どもを必要とする人がそこから拾っていく、というのが当たり前の風景であったそうです。捨て子は「物乞い」に売られたり、手足を折られて見せ物にされたり、世話が面倒になると飢え死にさせられる、といった悲惨な状況でした。

このような現実を目にしたヴァンサン・ド・ポールは、愛徳姉妹会という慈善団体を結成して、乳児院や養育施設をつくり、そのような子どもたちの救済にあたったのです。彼は捨て子の養育のほか、貧しい人びとの救済、病人の訪問看護、といった活動にその人生を捧げました。ヴァンサン・ド・ポールは、1660年に亡くなりますが、彼の精神は、サン・ラザール派の修道会と、愛徳姉妹会に受け継がれ、今日のフランスに根付いています。また、愛徳姉妹会は大阪の釜ヶ崎に無料診療所や病院を開設しています。

最後に、ヴァンサン・ド・ポールの言葉を引用しておきたいと思います。彼は、神のいとし子である、恵まれない人びとに終生尽くすこと、まさに神に身を託すことを、このように悟っています。「神が己の生活のなかに居着いており、しかもそれが生きる支えになっていなければなりません。

ん。それには神が何たるかをじっくり考えることです。それから神の王国を見出すのです。そうすれば、私たちは神の残りものにあずかることができます。神の仕事を手伝えば、神はきっと私たちの味方となってくださいます。」

法学部助教授(フランス法)

11月26日奨励

初期宣教師たちの信仰と学院

辻 直人

《マタイによる福音書 28 章 16 - 20 節》

みなさんご存知のように、今年はヘボン塾が始まってから 140 年目の節目にあたる年です。1863 年にヘボン博士が自宅の一部を開放して、日本人への伝道と教育のために私塾を始めたことが、今私たちの奉仕する明治学院という教育機関へと発展してきたわけです。更にもう一つ付け加えるならば、実は今年のもう一つの源流であるブラウン塾も 130 年を迎えるのです。その歩んできた歴史は、教育史の観点から見てもとてもユニークで、明治学院が 100 年を超える期間、教育活動を行い続けてこられたことは、改めて神に感謝すべきことです。今週のチャペルアワーは、その明治学院の歴史と人物というテーマで一週間奨励が持たれ、今日がその第一日目にあたるわけですが、今日私のお話では、明治学院の教育史上ユニークな点の一つと数えていい、宣教師たちの存在について考えてみたいと思います。幕末・明治初期に来日した宣教師たちの信仰とはどのようなものだったのでしょうか。

宣教師と言っても、もちろんヘボンだけではありません。ヘボンを筆頭に、ブラウン、フルベッキ、その他にも数多くの宣教師が来日し、明治学院に連なる歴史を作っていたのです。彼らの行動を支えた御言葉の一つに挙げられるであろう箇所として、今日お読みいただいたマタイによる福音書 28 章 16 - 20 節の部分が考えられます。これはいわゆる宣教命令と言われる箇所で、「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい」という御言葉に大いに後押しされて、宣教師たちは、当時まだ未開の地だった日本に上陸したと想像できます。当時の彼らに共通した「苦勞」とは何だったのでしょうか。

まず一つ目は、アメリカから日本までの長い航海です。例えばヘボン博士は日本にやってくる時、1859 年 4 月 24 日にニューヨークを出帆し、

アフリカの喜望峰を經由して 8 月 29 日に上海に到着、しばらく休憩の後 10 月 1 日再び出帆して 17 日に神奈川に入りました。数ヶ月もかけてやって来るわけです。航海中には当然悪天候もあり、多くの苦痛を伴うことは想像に難くありません。

二つ目は、来日してからの問題です。まず言葉の問題。まだ開国して間もない日本ですから、まだ日本語の文法書も当然のことながらなく、ヘボン博士のように、自らが辞書を作らなければいけないほどでした。それと同時に、西洋人に対しての偏見も当然ながら多くありました。幕末期はまだ侍は刀を持ち歩き、西洋から来た者に対しては異様なまでの監視も付く。常に危険を意識しながらの日本滞在だったでしょう。言葉も分からず、身の回りには敵も多い、このような生活でストレスを感じないはずはありません。しかもこの時代、キリスト教はまだ禁教だった。そのような中でも、どうにか日本人に宣教をしようと方法を模索していました。フルベッキやスタウトは長崎の藩校で教師を務めながら、ひそかに聖書を講じたりしておりました。正に「御言葉を宣べ伝えなさい。時がよくても悪くても励みなさい」(テモテへの手紙 4 章 2 節)の御言葉の通りです。

少し具体的に見てみましょう。例えば明治学院草創期を語る上で欠かせない出来事、宣教師にアメルマンという人がおります。彼は 1876 年に来日し、当時横浜で開かれていたブラウン塾の講師となりました。その後築地に移って東京一致神学校の実質校長を務め、更に明治学院となってからも神学部の教授として明治学院の教育に尽力してまいりました。井深梶之助、山本秀煌、植松正久などの代表的な神学者が彼のもとで教育を受けています。そんなアメルマンの経験を見てみると、正に満身創痍だったことが分かります。まず来日に際しては、航海中相当悪天候に悩まされ、「無事日本に到着できるかどうか心配だった」と夫人が書き残しております。

またアメルマンは日本にいる間、様々な病に苦しめられました。しかも彼だけでなく、家族も同様に病に冒され、苦しんだのです。伝道局宛書簡を読むと、何度となく自分や家族の健康状態に触れています。例えば 1885 年 6 月 3 日付伝道局コブ宛書簡には「娘ネリー(Nellie)がマラリア性の熱に冒されています」とあります。その二週間後の 6 月 18 日付書簡によれば「私の小さな家族がまた普通の健康状態に戻ったことを報

告します」、しかし今度はアメルマン本人が調子を崩してしまいます。

彼は、自分の体を酷使してまで仕事を最優先させ、神学校や執筆のことを心配しているのです。しかしながら、そのような仕事への意欲とは裏腹に、更に新たなる病気が追い打ちをかけます。1885年7月1日付書簡によると今度は腸の不調を訴えています。7月18日付書簡によれば、目や全般的な健康は良くなりつつあるものの、今度は目の不調から来る頭痛に悩まされているようですし、同年8月31日付書簡では、足に苔癬（皮膚にできた丘疹）ができて炎症を起こし、ひどい痛みを覚えていると記されています。これを満身創痍と言わずして、何と言えまじょうか。このような事態を、アメルマンはひどく嘆きました。

「神学校の働きを止めて家に戻らなくてはならないことは、私にとって大きな悲しみです。できれば私はここに留まりたい。でも、あとは神に委ねます。」

アメルマンにしてみれば、「主よどうして私は苦しまなければいけないのか」というヨブのような心境だったでしょう。日本における働きに情熱をもって取り組んでいたことが、これらの書簡からも窺えます。しかし彼の苦しみも、十字架に架けられたイエス様の苦しみと比べれば大したことではない。苦しむ度に彼は救いの御業を思い出して感謝していたに違いありません。そこまで自分の体に鞭を打ってでも、日本での働きを全うしようとしていました。神に仕えまた人に仕える、彼らの献身的な態度が、明治学院の歴史の根底にあるのです。

以上、見てきましたように、幕末・明治初期に来日した宣教師たちは、多くの苦勞を背負いながら、日本での働きを遂行したのです。この宣教師の姿勢から、何が学べるのでしょうか。やはり、主の御心に従い、神の使命を忠実に果たそうとしている姿が浮かんできます。それは自分の保身のためでなく、全ては神に仕え、そして人に仕えるためになされたことです。今、彼らの作った明治学院に属する者として、共にへりくだり、神の御心を実現していきたいと願わされています。なお、詳しくは、この3月に私が経済学部の大西晴樹先生や中島耕二さんと一緒に書きました『長老・改革教会来日宣教師辞典』をお読み下さい。

歴史資料館研究調査員
12月1日奨励

ヘボン塾につらなる人々

原 豊

《コリントの信徒への手紙 4章8-9節》

今年にはヘボン塾 140 周年ということで、10月25日に礼拝と式典が行われました。ヘボン夫妻は1859年、神奈川県に上陸し、成仏寺に住みました。その後、1862年（文久2年）暮れ、横浜の外国人居留地39番の土地にヘボン邸を建て、引っ越しました。翌1863年（文久3年）9月頃、ヘボン邸で少年少女を集めヘボン夫人が英語を教えはじめました。塾生の最初は、後に外務大臣になった林薫、遅れて沼間守一（後に東京横浜毎日新聞社長や立憲改進黨党首となった）、翌年4月頃から高橋是清（日本財政の守護神、総理大臣、大蔵大臣を歴任し、二・二六事件で倒れた）、鈴木知雄（後に日本銀行出納局長をつとめる）、少し遅れて益田孝（三井物産、日本経済新聞）がいました。その翌年には佐藤百太郎（百貨店を開いた）が入学しました。日本で最初の医学博士であり東大の初代医学部長になった三宅秀（ひいず）は、慶応2年頃、ヘボン博士の医療助手をしながら、ヘボン夫人から英語を習いました。その他、加賀藩派遣の青年やヘボンの医学生もヘボン塾で英語を学習していました。

しかし慶応2年、ヘボン夫妻が「和英語林集成」の印刷のため上海に渡航すると、高橋是清らの生徒は一時、J.H.バラ夫人にあずけられます。翌年5月ヘボン夫妻が横浜にもどると、ヘボン塾は徐々に生徒数が増加してきました。7月頃からはコーズ夫妻がヘボン塾教師となり、明治2年8月頃からは、カロザースが一時ヘボン塾教師となります。この頃正田作次郎（美智子皇后陛下の曾祖父であり、日清製粉の創業者正田貞一郎の父）が入学、翌明治3年9月にはS・R・ブラウンの紹介で、メアリー・キダー女史がヘボン塾教師となります。キダー女史は明治4年になると女生徒だけを教えるようになり、やがて明治5年7月、神奈川県権令大江卓の斡旋で野毛山の官舎の一部を借り、そこで独自の女子教育を行いました。これが現在の横浜のフェリス女学院になって行きます。女子部を分離、独立する形となったヘボン塾は、ヘボン夫妻が明治5年10月か

ら翌年 11 月末まで帰米した間、ヘンリー・ルーミスやエドワード・R・ミラーたちによって支えられていました。明治 6 年 12 月になると、O・M・グリーンが宣教師館に居住し、ルーミスとともにヘボン塾を応援します。明治 6 年 2 月には、切支丹禁制の高札が撤去され、キリスト教伝道がようやく黙許されるようになり、日曜学校が盛んになりました。

明治 7 年 9 月、ルーミスから洗礼を受けたヘボン塾生を中心とした 10 名の受洗者により、横浜第一長老教会がヘボン塾において設立されます。この教会はやがて住吉町教会となり、横浜指路教会へと発展していきます。

明治 8 年 9 月からジョン・C・バラがヘボン塾で教えるようになります。明治 9 年 1 月にはヘボン夫妻はヘボン邸をバラに譲り、山手に家を借り転居します。この頃からヘボン塾はバラ学校と呼ばれるようになり、明治 13 年までつづきます。このバラ学校では、明治学院の教師となっていく服部綾雄（ヘボン塾時代から在籍）や石本三十郎はもちろんのこと、明治のキリスト教界の大物松村介石や関東大震災で焦土と化した指路教会を再建した実業家成毛金次郎、衆議院議員根本正（禁酒・禁煙運動家）、三井製薬の創業者の一人西村庄太郎が学んでいます。

やがてこのバラ学校は、明治 13 年になると築地明石町の築地大学校となります。この頃、築地大学校では「夏は来ぬ」（卯の花の匂う垣根に）を作曲した小山作太郎や、「兎と亀」（もしもし亀よ、亀さんよ）で有名な納所弁次郎が入学しています。この築地大学校は、明治 16 年には横浜の先志学校と一緒に、東京一致英和学校となっていくます。

明治 17 年、神田淡路町に東京一致英和予備校ができると、明治 19 年には日本昆虫学の始祖松村松年や、野球国際試合の先駆者で同志社野球部の創部者白洲長平が入学してきます。

そして明治 20 年には東京一致神学校、東京一致英和学校と東京一致英和予備校の 3 校が合併して、白金の丘に一大クリスチャンスクール明治学院が誕生し、明治の「文学界」という雑誌で活躍する島崎藤村、戸川秋骨、馬場孤蝶や画家の和田英作、三宅克己、岡田三郎助、商工大臣をつとめた中島久萬吉が入学してきます。明治 30 年代後半には、キリスト教社会事業家の賀川豊彦や小説家で童話作家の沖野岩三郎が入学、そして明治 45 年（大正元年）には日本のダンス王といわれた玉置真吉や、日本オペラの創始者藤原義江が入学してきます。大正 9 年には中学部卒業

の真空管の発明者安藤博（（財）安藤研究所所長）を出しています。ということで、ヘボン塾につらなる明治学院は、各界に一流の人物を輩出し続けています。

これらの「ヘボン塾につらなる人々」に登場してくる人物は、同窓生の島崎藤村の作詞した「明治学院校歌」の中に、

「もろともに遠く望みておのがじし道を開かむ、
霄あらば霄を窮めむ壤あらば壤にも活きむ」

とあるように、逆境にも負けず、おのがじし道を開拓して行った人々であり、クリスチャンであるなしにかかわらず、どこかしらキリスト教精神を身につけた人々だったと思います。そして皆様もヘボン塾につらなる人々です。人生晴れの日ばかりではありません。人生どん底で八方ふさがりの時、日本のダンス王と呼ばれた玉置真吉が大事にした聖句、“コリントの信徒への手紙 2”の「わたしたちは、四方から苦しめられても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされない」をどうか思い出して、これからの人生を歩んで行っていただきたいと思います。

歴史資料館職員
12月2日奨励

ヘボン夫妻だけの初礼拝

村上 文昭

《詩篇 19 章 1 - 5 節》

日本ではヘボンと呼ばれていますが、正しくはヘップバーンです。そのヘボン夫妻が 1859 (安政 6) 年 4 月、日本で宣教するためにニューヨークを出帆しました。いったん上海で休養してから、10 月 18 日に神奈川に上陸したのです。三ヵ月前の 7 月 1 日、神奈川は長崎・函館と共に開港したばかりでした。

神奈川というのは、今の横浜市神奈川区、JR 東神奈川駅の東側の東海道神奈川宿があった一帯を指します。現在は青木橋があるそばの本覚寺という大きなお寺が、アメリカ領事館に当てられましたし、附近のお寺には英国・フランス・オランダなどの領事館が入っていました。

内外の物産などを売り買いする民間人は、幕府の強い働きかけにより、横浜の居留地で活動するよう命じられました。そこは大急ぎで造成されたところです。今の関内から山下町までの広い一帯になります。

開国はしてもまだキリスト教を公然と伝えることができません。通りの辻には切支丹禁制の高札が立っているからです。

外交官でも貿易商人でもないヘボンはただの民間人です。しかも夫妻で来日するのは、まだ珍しいことでありました。それほど日本は物騒で危険な国と思われていたからでした。

アメリカ領事の紹介で、いまの神奈川本町にある小さくて粗末なお寺、成仏寺を借りることになりました。前に借りたオランダ領事は、あまりの荒れた寺なので馬の厩舎のようだといい、別の寺へ移っていったほどうでした。今は通過する電車から、お寺の屋根がわずかに見えるだけです。

船から家財道具や書物、ヘボン先生はお医者さんですから医療器具など 10 トンもの荷物を、成仏寺に運び入れました。これには地元の何十人もの力を何日も借りたことでしょう。お寺ですから多くの仏像や仏壇、それに仏具があります。それらを別棟に移しました。広くなった本堂に

積み上げられた荷物を一つ一つ片付けていながら、仕切りを作って部屋のようにしたものでしょう。日本人の大工さんに棚を作ってもらい、暗い本堂を明るくするための窓を開けてもらったりしました。

片付けで忙しくしている三日目に、最初の日曜日を迎えました。ヘボンは仕切りの一カ所を礼拝所に見立てて、妻のクララと二人だけで礼拝を行うことにしました。説教者はヘボン、聴衆は夫人一人だけでした。これが日本で最初の礼拝ということは、プロテスタント最初の礼拝ともいえるものです。寺の外には警護と称して幕府の監視の目が光っていますし、外国人を夷荻という尊皇攘夷の浪士たちが襲ってきそうな、不穏な空気が覆っておりました。異国で迎えた夫妻の説教と祈りには、いつの日か日本での宣教が大きく実っていきますようにと、そのため差し当たったの困難や不便にも助力をお願いしたかもしれせん。なにしろ言葉が通ぜず友達もいないのですから。この日は 10 月 22 日のように思われます。

次の日曜日には、横浜に入港した船の船員一人が、誰に訊いたのかやってきました。三回目のときにもう一人が加わりました。このときには宣教師のサムエル・ロビンズ・ブラウン (S・R・ブラウン) と宣教医のシモンズが上海からやってきて、ヘボン夫妻の成仏寺で一緒に暮らすことになります。二人で始めた礼拝は、ブラウンとシモンズも加えて 6 人になりました。やがてブラウンが上海に残してきた家族が到達すると、礼拝はオルガンが奏でられて、さぞにぎやかであかるいものとなったことでしょう。たった二人で始めた礼拝には、船員や居留地のアメリカ人、それに領事館員も含めた大人数の日曜礼拝になっていきました。ヘボン夫妻最後の贈り物の一つが、横浜の指路教会になりました。この他に、日本へ残した贈り物はいくつもあります。西洋の医術をもって誰彼の区別なく治療し、治療費を受取ることをしませんでした。日本人のお医者さんを養成することも行いました。精錡水という目薬を作って頒け与えたことは、よくご存知でしょう。

皆さんがパソコンなどで使用するローマ字は、多分ヘボン式でしょうが、ヘボンさんが創案したローマ字表記であります。このローマ字を用いて、日本で初めての和英辞書を編さんしました。幕末から明治にかけて、外国人はもとより、多くの日本人がこの辞書の恩恵を蒙っております。

今年、明治学院はヘボン塾開塾 140 周年の記念行事を行ったので、お分かりのように横浜居留地 39 番地のヘボン館の小さな塾から始まりました。おもにクララ夫人が受持ったのですが、明治の様々な分野で活躍する優れた人材を輩出したのです。この流れが次第に太い川となって、今日の明治学院という港となっております。

さらには聖書の翻訳の功績があります。いま皆さんがお使いの聖書は共同訳口語聖書ですが、ここに至るまでには、幕末から百数十年の歴史を持っております。はじめは個人の訳でした。ヘボンやブラウンも個人訳を作っております。やがてプロテスタント各派から翻訳委員がでて、新約聖書の共同訳に七年を要して完成させました。激しい議論や深い検討を重ねての末です。翻訳委員会は次に旧約聖書の翻訳を 8 年かけて完成させました。新約と旧約の両聖書翻訳で中心を担ったのはヘボン博士でした。

先ほど朗読した聖書は、旧約聖書詩篇の第 19 篇です。文語で読みましたが、現在の共同訳とぜひ比べてください。文語訳を選んだのは、ヘボンの下訳を奥野昌綱、更には井深樞之助、植村正久といった明治学院に縁のある人達が助力して出来上がった日本語だからです。ここでの日本語がどれほど正しく立派な日本語であるかを言いたいからであります。例えば 3 節目の「この日このことばをかの日に伝へ、この夜知識をかの夜に送る」は明治の詩人の詩句に、ひびくこだまとなつてうたわれたほどでした。

前にもあげた「和英語林集成」という和英辞書の正しくすばらしい日本語と、聖書の格調高い日本語の文章は、その後の日本人の中にごく普通に使われるようになりました。辞書や聖書などの知識や知恵は、次代へと受けつがれていったのです。ヘボンの 33 年間かけた事業は、地下水となって今も湧き出ているように思います。はじめに歌いました賛美歌は「昔主イエスの・・・」で始まります。もう一度この箇所をご覧ください。

昔主イエスの 播きたまいし いとも小さき 生命のたね、
芽生え育ちて 地のはてまで、 その枝を張る 樹とはなりぬ。

主イエスをほめたたえる歌であるのに、この詩を読んだり聞いたりす

るとき、ついイエスの代わりにヘボンと置きかえてみたくになります。このように例える私に対し、ヘボンさんは「とんでもない、やみねえやみねえ」、よしなさいとってお叱りになりそうですが、皆さんにはそのように読みとれませんか。それほど大きな仕事を数々残したヘボンさんだったからなのです。

非常勤講師
12 月 5 日 奨励

無限な愛

手塚 奈々子

《ヨハネによる福音書 20章 11 - 18節》

今週全体のテーマは“愛と欲”です。私は先ほど読んだ聖書からマグダラのマリアの愛と欲を見て、私たち自身の愛と欲の問題を考えてみようと思いました。

今日の聖書に登場してくるマグダラのマリアという女の人は、ルカによる福音書のなかで、「7つの悪霊を追い出してもらったマリア」と書かれています。おそらく、以前は娼婦だったろうと言われています。「7つの悪霊」というのはすごくオーバーな表現ですが、悪のどん底に染まって生きていたというような意味です。こういう表現は、当時女性に対しては娼婦を意味していました。このマリアはイエスに出会って、生活を変えました。彼女はイエスに出会うまで、いわば肉欲の世界にいました。娼婦はセックスどっぷりの世界で生きざるをえません。どんな理由があったにせよ、そういう世界で生きてきたマリアは、イエスに出会ってすっかり生活を変えました。イエスの愛は、娼婦だったマリアが体験してきた男の人たちとの肉欲がらみのものとはまったく違っていました。イエスの愛は「相手を大事にする、大切にする」という愛です。おそらくそういう愛に初めて接してマリアはとても嬉しかったと思われます。生活をすっかり変えて彼女はイエスの弟子になりました。

肉欲の愛というのは、気持ちがなくても可能なものです。相手を愛していなくても、自分の肉欲を満たせばそれでおしまいという世界です。自分の体は肉欲を満たす道具でしかありません。でもキリストの愛は、肉欲とは違う次元にあります。マリアを一人の大事な人間として見て、彼女に尊厳を与え、大事な大切な価値ある者として接してくれたのです。それまでのマリアの知らない愛を、イエスはおそらく示したであろうと思われます。それでマリアはイエスに惹かれていきます。

よく言われることですが、このマグダラのマリアはイエスのことを好きだったのではないかとされています。例えば、現代のミュージカル

で『ジーザス・クライスト・スーパースター』というのがありますが、ここでもマグダラのマリアは恋人のように描かれています。

今日の聖書箇所からも、「わたしの主が取り去られました」とか「わたしが、あの方を引き取ります」とか、すごく強い言葉をマグダラのマリアは言っていますが、彼女のイエスに対する想いの強さが表れていると思います。普通、人が誰かに「私の」という言葉をつける時、相手に対する強い想いが表れていると思います。例えば、私はサッカー選手が好きなのですけれど、特にミランのディフェンダーのシミッチ選手が大好きなので、その話をする時には「私のシミッチ」と言うのです。やっぱり特別な想いを込める時に使うと思うのです。

マグダラのマリアの話に戻りますが、日本では残念なことに、あまり好かれていない傾向にあると思います。どちらかということ、清らかなイメージのある聖母マリアの方が人気があると思われれます。でも外国ではマグダラのマリアはとても人気があって、特にフランスでは「マリー・マドレーヌ」という名前で知られ、たとえばフランスのパリのど真ん中にあるブランド街には、あのナポレオンが建てた、堂々としたマドレーヌ寺院がありますし、マドレーヌというお菓子の名前でも知られているように、マグダラのマリアはとても人気があります。

今日の聖書箇所では、イエスが死んだ後その遺体がないことで泣いているそのマリアの様子が最初の方で言われています。泣いているマリアにはおそらく、愛している人のお墓を大事にしたい、遺体にしがみついていた、形見がほしいという気持ちがあると思います。この「形見がほしい」というのは別にいいことなのですが、でも少し消極的な、後ろ向きな面もあると思います。その人との思い出に生きていたいという、何かこうちょっと後ろ向きな消極的な面です。過去にしがみついて生きようという傾向があります。でもそれに対してキリストは新しい姿でマリアの前に現れます。復活のキリストとして現れて、過去にしがみついて生きていこう、思い出だけに生きていこうというマグダラのマリアの後ろ向きの姿勢を前向きに変えて下さる様子が見られます。復活のキリストに出会う前のそれまでのマリアの愛は、キリストの愛とは違うレベルにあったと考えられます。マリアはおそらくキリストを好きだったでしょうから、恋愛と肉欲で愛していたと思います。

キリストはそれをだめだと言っているのではないことは、彼女に一番

初めに出現されたことからわかります。マグダラのマリアは、キリストの復活に最初に出会った人です。聖書では、復活のキリストが一番最初に出現したのは、すごくかわいがっていたペトロやヨハネなど男の弟子たちではなくて、このマグダラのマリアに最初に現れたとされています。これに関してはいろいろ解釈がありますが、マリアの愛に報いたのではないとも言われています。キリストは、このマリアの恋愛感情や肉欲を否定するのではなくて、キリストはその情熱の方向を違う方へ向けようとしていると思います。二人だけの思い出、過去の世界に閉じこもりとするマリアに新しい大きな道を示しています。それが「わたしにすがりつくのはよしなさい」という言葉に表れていると思います。キリストは、すなわち執着するのはよしなさいと言っているのだと思います。

私たちの恋愛感情には相手を所有しようという動きがあり、自分のものにしようします。キリストはマリアのそのような態度をもっとオープンにするように仕向けます。自分にすがりつかず、しがみつかず、前を向いてこれからの人生にかけていきなさいとマリアを前に向け、ご自分が神のところに「上る」という大事な伝言を弟子たちに伝えるようにと彼女に使命を与えています。マリアはそういうキリストに従いました。彼女はキリストの弟子として立派に生きていきます。目に見えるものに執着して生きていこうとしていたマリアが、目に見えないキリストの愛を信じて自分の人生を前進して生きていきます。

ここに所有欲から解放されたマリアの姿が見えると思います。

欲の一つである所有欲というのは、人間にすごく根深いものだと思います。私達は何かを所有すると安心しますね。時々女の人によく見られるのですけれど、特に自分の恋人を所有しようとする傾向があります。自分に捕まえておこうとするのですね。まあ男の人でもそうだと思いますが、そうすると安心するのですね。相手がくれた指輪に執着することなど挙げられます。でも本当に大事なものは、ダイヤモンドの指輪ではなくて、相手の気持ちです。あの人は私にこれをくれたから私を愛しているなど、物ではかろうとする気持ちが私たちにはありますが、物は気持ちがなくてもあげることができるのです。本当に大事なものは、その物の背後に気持ちがあるかどうかということです。気持ちがあれば物はいらぬというか、どうでもいいものとなります。本当にこの人が私を愛し

ているという確信があれば、何かにしがみついて生きていく必要はないわけですね。マリアは前に進みます。キリストはマリアの生涯を賭けた、人生を変えたそういう恋愛感情に応えてマリアの心を傷つけずに彼女の恋愛する性欲とかそういうエネルギーを前に生かす道を教えます。彼女とキリストは過去だけの関係ではなくて、これから無限に深まっていく愛へと変わったのです。

ところでよく誤解されている点ですが、キリスト教は肉欲やあらゆる欲とは無関係のものと思われがちです。欲というものを一切絶って、清くなりましょうというイメージがキリスト教には強いと思います。でも実際は逆です。キリスト教の伝統では欲を活かす事が求められます。欲望というのは一つの大きなエネルギーで、たとえば性欲とか食欲とか、何でも欲しいという欲望はものすごく大きなエネルギーで、人間を実際に動かすことができる、そういう力です。エネルギーは生きる活力であって、それ自体はとてもよいものです。生きる力がなければ死んだように生きるしかないわけです。生き生きしている人はやっぱり美しいですね。ですが、この生きる力やエネルギーの問題は、その方向だと思いません。このエネルギーの方向、欲望の力がどこに向けられるかということが問題になると思います。自分のためだけに、エゴイスティックに使うと悪い結果になるのですが、良いことに使うと、とても素晴らしいことを成し遂げる、欲望とはそういう力だと思いません。キリスト教で聖人と言われる人たちは、すごく性欲の強い人たちだと言われていますけれど、こういう欲望が強くなければ、とても大きなことはできません。彼らは大きな欲望を神のために使ったのです。もしそういう欲望する力がなかったら、何も神のためにもできないです。欲望する力の大きい人こそ、神のためにも大きく働けると思っています。

私たちも誰かを愛します。修道者にとってダーリンというのは神です。常に前へ向けて愛を高めるように求められますが、結婚する人たちにも、二人だけの世界に閉じこもるのではなくて、その愛する二人で、神に向かって前を向いて生きていくことが求められていると思います。ぜひとも与えられたエネルギーで、自分の持っている欲望の力を生かして、それをよい方向に向けて生きていきたいものだと思います。

社会学部助教授(キリスト教学)

6月13日奨励

ベトナムで学んだこと

樋口 潔

《コリントの信徒への手紙 13章 1 - 7節》

JUNKO Association(以下 JA)のベトナムでの活動を通して、学んだことを語ります。

まず、JA についてご説明します。ちょうど十年前の 1993 年、当時明治学院大学国際学部三年生だった高橋淳子さんは、江橋正彦教授のゼミを専攻し、夏にゼミの研究のため一ヶ月間ベトナムに滞在しました。そこで淳子さんは途上国で生活する人々が健康に暮らし、十分な教育を受けられるようにと願います。そして再びベトナムに赴こうと思っていた矢先の 1993 年 12 月、彼女は交通事故でこの世を去りました。「世界の恵まれない子どもたちのために」という彼女の意志を継ぐために、彼女のご両親と江橋ゼミの仲間たちが中心になり、JUNKO Association を組織し、その第一歩として 1995 年 9 月、ベトナム中部のダナン市から車で三十分ほど行ったディエンフォック村に JUNKO School を開校しました。そしてそれから八年間、現在はベトナム・ミャンマーに活動を広げ、貧しい子どもたちへの助成金活動と交流活動を展開しています。また自分たちで活動資金を稼ごうという理念を持ち、現地で雑貨を買い付け、日本で卸し利益を上げています。

こういう活動をしていることを話すと、まわりの人によく言われるのが、「ボランティアやってるんだー、すごいねえ。」とか「えらいねえ。」です。日本では「ボランティア」という言葉は特別ですごいこと、偉いことだというイメージがあるように思います。このまわりの反応にだんだん違和感を覚えるようになりました。果たして自分がやっていることはそんなに特別で偉いことなのだろうか、と。自分たちが何かをしてあげているというより、むしろ子どもたちやベトナムの社会から得るものの方が大きいし、今まで JA を続けられているのも、実際に赴いたベトナムという国が大好きになり、そこでの活動が楽しいからであって、JA の活動がボランティアであるとか、そのためにベトナムに行っているとい

う感覚はないので、特に偉いことではないと個人的には思っています。

ここで、ベトナムで出会ったある家族を紹介したいと思います。ダナンにおいて JA が助成金を支給している学校のうちの一つで、「Hai Ba Trung」という小学校があります。この学校の受給者で Du ちゃんという女の子がいます。彼女に初めて会ったのは 2002 年の夏でした。五年生なのにとっても小さく、やせていて、見ていて心配になるくらいの子でした。助成金を支給したあと、家庭訪問をしました。彼女の家はダナンでも最も貧しいスラム街にあって、環境的にも不衛生で、ドブのような悪臭を放つ沼地の周りに人が住み、トタンの簡素な造りの家が密集しているような地域でした。学校では緊張して、ずっと静かで元気のなかった Du ちゃんも家に帰った途端、はしゃぎだして、お母さんに甘えたりお姉ちゃんとふざけたりし始めました。とても明るく、常に笑顔でこちらまで思わず笑ってしまうような、幸せそうな、正に愛に溢れた家族でした。特にお母さんの笑顔は素晴らしいの一言で、全てを包んでくれるような優しさを感じました。しかし現実には、貧しさの中、娘を学校に行かせるのも困難で、しかもお父さんはかなり重い病気で働けず、収入がほとんどない状況でした。そんな現実を感じさせないくらいの、この家族の明るさは何だろうと不思議に思うくらいでした。幸せと経済的な貧しさは関係ないと感じさせられました。本当に豊かな人たちでした。しかもお母さんは、近所の、貧しくて学校に通えない子どもたちを家に集めて、寺子屋のように学校を開いていました。それこそ無償です。

今年の春、またその家族を訪ねることができました。残念なことに、お父さんは病気で亡くなってしまっていました。家庭から笑顔は消えることなく、変わらない優しさで私たちを迎えてくれました。お母さんがあの素敵な笑顔で今も子どもたちに勉強を教えている姿を見て心を打たれ、そこに本当の愛を感じました。日本であればお母さんがやっていることは立派なボランティアだと言えるでしょう。しかし彼女はボランティアという言葉を知らないどころか、それをさも当たり前のようにやっています。そこには愛があるのでしょうか。誰かが困っていたら助けてあげるのは、人として当然のことだと改めて気づかされました。それがベトナムのスラム街では自然に見られます。食べるものがなければ分けてあげて、病気の人がいればみんな面倒を見てあげる。学校に行けない子どもたちがいれば、家に呼んで勉強を教える。現代の

日本はそれが当たり前のことではないから、ボランティアとやたら叫んで偉いことをしているように錯覚してしまうのでしょうか。人のために何かするのが特別なことになってしまっているのではないのでしょうか。だから福祉ビジネスなどが流行って、人のために何かしてお金儲けまでしているように見えてしまいます。いつから子どもと遊んだり、勉強を教えたり、ゴミを拾ったり、お年寄りのお世話をするのがボランティアなどと呼ばれて、偉いこと、特別なことになってしまったのでしょうか。

聖書には「そこに愛がなければ、どんなに偉大なことを語ってもうるさいだけだし、どんなに才能があっても知識があっても、山を動かすほどの信仰を持っていても、愛がなければ無意味である」とあります。ボランティアと言われることもそこに愛がなければむなししいと思います。そこに愛があれば、誰かのために何かをするということは自然なことだと思います。そこに愛があれば、困っている人がいたら助けたいと思うのが自然だと思います。きれい事だと片付けられてしまうような今の世の中ですが、それがベトナムで教えてもらった人間のあるべき姿だと思います。全ての人に、生命に思いやりを持つことはとても難しいけれど、大事なことだと学びました。ボランティアという言葉が必要以上に聞かなくてすむ、それが当たり前になる社会を望みます。

国際学部 3年
6月30日 奨励

委ねて、生きる

深谷 美枝

《ルカによる福音書 12章 22節 - 31節》

キリスト教に馴染みのない皆さんは、信仰というと何か特別で不思議なこと、胡散臭いことのように感じる人がいるかもしれません。でも「そうではない」ということを話したくて、私は読書会を開いて聖書を読んだり、チャペルでこんなふうに話したりしているように思います。

読書会(私は聖研と呼んでいます)でいつも私が話すこと、分かってもらいたいと思っていることは三つです。

一つ目はキリストの愛が大きく、温かいこと。二つ目はその愛を信じて自分を委ねて生きること、その喜び。三つ目はその二つに支えられて、今度は自分が隣人愛に向かって歩き出すことです。

今日のお話は二つ目のことにあたります。

小学六年生だった当時、担任の教師が言いました。「神を信じるのは弱い人のすることです」。彼女が言ったその言葉は私の心に引っかかっていました。「私は弱いから、神を求めるのだろうか?」と。中学生時代キリスト教主義の学校にも関わらず洗礼を受ける人は殆どいない中で、やはり自分に問いました、「自分は弱いから、そうするのだろうか?」と。

人間はみんな弱いものだし、自分もそうだからそれでいいのだと思いましたが、どうもそういう自分を積極的に評価することが出来なくて、長いこと生きていたように思います。

確かに日本人にとって、神仏にすがるといのは最終手段であり、「人事を尽くして天命を待つ」ことは奨励されますが、日常的に神に自分を委ねて神と足を合わせて生きていくことは、自立できていないだとか、弱いことのように思われても仕方ない節があります。

しかしそういう私の感じ方を覆されるような事件が25歳の時におきました。それは父のくも膜下出血の手術という事件です。十時間にも及ぶ手術でしたし、術中に発作が起きれば助からないと言われていました。

その時に母親と妹、そして私の心理的な状態があまりに際立って対照

的でした。それは母親や妹は術中も思い煩うのです。死んでしまったらどうしよう。生きていても障害が残ったらどうしよう。障害が残ったら、みんなで心中しよう。日ごろ強がって信仰などというものをバカにしている母はそんなことまで口走る始末でした。

いつも自分をお任せする、ということを癖にしている私は、そのときは不思議なくらい平安でした。自分でも奇妙でした。しばらく祈ると、心に不思議な安心がぱーっと広がったのです。大丈夫だ。父のことは神様が心配してくださるので、何も考えなくていい。思い煩うな。今日読んだ聖書の箇所が心に浮かんだのです。

そこで気づいたことは、本当の強さとは土壇場ギリギリの強さなのだ、土壇場ギリギリで神を信頼して寄りかかっている自分の方が、心中しようと騒いでいる母よりも強いのだ、強くされているのだということです。普段弱そうに感じられても、土俵際で動かないで、信じて委ねて生きていく、という生き方は、弱いようでいて本当は強い生き方なのだということなのです。

父は助かりました。後遺症も残りませんでした。そして退院後に突に不思議なことを口走っていました。手術の晩、誰もいないはずなのに、「一晩中枕元で人の気配がしていた。誰かが見守っていてくれた。」と。母と妹は気味悪がりしましたが、私は感謝しました。

そのときから私は自分の生き方、「委ねて生きる」ということに価値をおけるようになりました。聖書を読むと、人は委ねて、のほほんと生きることが求められているのだとつくづく思うのです。それはなるようになるとか、川の流れのように流されて生きるというのでは決してありません。目には見えないけれど、確かにこの私を愛して覚えていてくださる存在、髪の毛一本まで数えていてくださる存在のまなざしに温められてのほほんと生きることなのです。

社会学部助教授(社会福祉実習)

7月3日奨励

平和を思い出す

高原 孝生

《マタイによる福音書 5章9節》

国際政治学を専攻している私は「平和学」という授業を担当しています。ゼミで学生たちと広島に行き、沖縄にも校外実習で学生たちを連れていきます。

そうした中で、学生たちが「平和」について様々なことを発見するのを目撃します。基本的なところでは二点です。

第一に、平和を求め続けることに意味がある、という発見です。

「平和」というと、あたりまえ。「平和」を唱える人たちがいるけれど、その人たちは綺麗ごとを自己満足気に口先で語っているだけではないか。憲法9条や戦後日本の平和主義は建前に安住している体制派の主張ではないのか。

そんなイメージを抱いている人が、生半可に本をかじったような人の中に見られます。それが勉強をすすめていくうちに、そうではないことに気づいてくれます。

毎年原爆忌の広島・長崎の行事が象徴的でしょうが、マスコミが大きく取り上げることで「平和」にはいかにもメジャーなイメージがあるかもしれません。

しかし現実はそのではなくて、戦後世界をふりかえるとわかるように、平和はいつも脅かされ、とても壊れやすいものでした。そして戦後日本の権力者はむしろ、平和主義の理想とは反対の方向に国を持っていかうとしてきました。それに抵抗しながらようやく、国民の間に平和主義が根づいてきた歴史があります。

平和は意識的に大事にしなくてはいけない。危うくて、求め続けていないととりかえしがつかないことになるかもしれない。この数年の事件や戦争からそのことは学生たちにもわかりやすくなっているようです。

第二に、平和は、遠い、高いところでの問題ではなくて、実はとても身近なものだということです。

周りの人々となごんだ気持ちになれる。ほどよい距離をとりながら協力していく。お互いのいいところを引き出していくような人間関係のありようを、日常世界につくっていくこと。逆に言うと、人を脅かし、相手や自分の可能性を抑圧するような「暴力」を拒絶していくこと、それが「平和」の実践なのだ、ということにも気づきます。

「平和の風景」を絵に描いてもらおうと、その中には必ず、なんらかのかたちで他の生命が描きこまれているものです。絵の中に家族、友達、人々がいる。あるいは動物たちがいて、花や草木が描かれます。そうした命の世界に包まれるように、自分の平和があるということ、私たちが実はわかっているのです。

これは自分を周りから遮断して守ろうとする「安全保障」の発想とは、質的に異なるものです。そうではなく、周りの命と共に生きることこそ「平和」はあります。

自分を今の範囲に閉じこめなくて、自分を生かしてくれている生態系の中で、授かった内発性を解放させていく、そうしたありようが「平和」だったのだと、元から知っていたものであるかのように思い出したいものです。

今日弾いていただいた曲は『アメイジング・グレイス』。奴隷解放の歴史を思い出させてくれる歌です。暴力を行使するのも人間のありようですが、その対極にあるのが本来の文化です。

歌の力には大きなものがあります。今、平和を求める人たちの間で歌われる歌は何でしょうか。この時代に呼応した新しい平和の歌が次々と作られているのかどうか、近頃気になっているところです。

国際学部教授
10月10日奨励

力と愛とつつしみと

司馬 純詩

《テモテへの手紙 1章7節》

神は、おくびょうの霊ではなく、
力と愛と思慮分別の霊をわたしたちにくださったのです。

昨年の秋学期の奨励で、私は「ジェームス」のことをお話ししました。今日もまたどこかで、私のよく知る人「ジェームス」の話につながります。

アメリカの町は移民によって作られた町です。人工的なデザインで、南北に走る道はアベニュー、東西に走る道はストリートの名がつきます。日本人や日系人はこれを「7番街」とか、「42丁目」とかいいます。その方がいい易いのです。ニューヨークの7番街と42丁目といえば、有名なタイムズスクエアです。この二つの通りの交差に、斜めに走るブロードウェイがさらに交わり、周辺に無数のミュージカルの劇場が集まっています。いわゆるブロードウェイの劇場街であり、また、年末のカウントダウンでも有名な広場です。

ジェームスはここからそう遠くない、42丁目沿いに病院を持っています。若い優秀な医者は31才の時ここに開業し、13年後の44才の時にすべてを売り払って旅に出るのです。病院も家も、家財道具一式、すべて。そして永い、永い旅に出るのです。

今日の奨励の題は「力と愛とつつしみと」です。先ほど聖書朗読で読んだように、新共同訳の聖書では「つつしみ」は「思慮分別」と変わっています。いずれにしても、その本来の意味は「神の教えに従って、逸脱しないよう」な生き方をさすのです。そこで、私は古い訳の「つつしみ」を使いました。

私はテモテへの第二の手紙のはじめの方にあるこの言葉が、殊のほか好きです。人が生きていくとき、さまざまな喜怒哀楽があります。楽しいこともあれば、悲しいこと、つらいことも当然にあります。そこで、キリスト者であったとしても、多くの人々が持つ疑問は、次のようなものです。「神様、あなたが私達一人一人を作り出し、いつもその一人一人を

見守って下さっているのなら、なぜ私に苦しい時や、つらいときがあるのでしょうか。」

神様はなんと答えるでしょうか 私にはわかりません。でも、生きていくときの逆境や試練に対して、神様は別の賜物を与えてくださいました。それは「力と、愛と、つつしみの霊」です。信じることによって、あなたは強い力を得ています。信じることによって、あなたは大きな愛を得、そして与えられます。力と、愛とに恵まれ、つつしみをもって生きなさい。

これが今日の奨励の題にこめられたメッセージです。

ジェームスは44才。学生の皆さんの親御さんに近い年になって、成功している病院など全てをたたんで旅に出るのです。何のためでしょうか。

聖書の中にも旅の話が多く出てきます。その一つにタラントンを残して出て行く旅人の話があります。ちょっと妙な話なので考えてみましょう(マタイによる福音書 25章 14 - 30節)。

これはある人が旅に出るにあたり、下僕たちに自分が持っているお金、タラントンを残していく話です。それぞれの下僕に合わせて、異なる金額を預けて旅に出ます。一人には5タラントン、もう一人には2タラントン、最後の一人には1タラントン預けます。5タラントンを預かった下僕は、早速町に出て商売を始めます。そしてさらに5タラントン儲けます。2タラントン預かった下僕も町に出て商売をし、さらに2タラントン儲けます。最後に1タラントン預かった下僕は、家から外に出て、穴を掘ってそのタラントンを隠しておいたのです。

かなりの時が経って、主人が旅から戻ってきます。そこで5タラントン預かった下僕が出てきて、「ご主人様、ご覧ください。5タラントンを預かりましたが、さらに5タラントン儲けて10タラントンになりました」と言いました。主人はたいそう喜んで「忠実な良い下僕だ」と褒めて、以降多くのお金を管理させるようにしました。2タラントンを預かった下僕も出てきて「ご主人様、ご覧ください。2タラントンお預けになりましたが、2タラントン儲けました」と言いました。主人はやはりたいそう喜んで「忠実な良い下僕だ」と誉め、以降多くのお金を管理させるようにしました。

最後に1タラントン預かった下僕が出てきて、「ご主人様は...いろいろと厳しい方と知っていますので、私は恐ろしくなり、あなたさまのタラ

ントンをなくさないように地の中に隠しておきました。ご覧ください、これがあなた様のタラントンです。」ところが、主人はこれを怒るのですね。「怠け者め。この男のタラントンを取り上げて、10タラントン持っている者に与えよ。」考えてみると妙な話です。5タラントン、2タラントンを預かった下僕は、町に出て商売という危険を冒しているのです。もしかしたら、損をして全て失くすかもしれないのです。これに対して1タラントンを預かった僕はそれを大切に土の中に埋めて、ご主人の帰りを待って、きちんと返したのです。

なぜ、その生真面目な下僕が叱られなければならないのでしょうか。実はこの主人、1タラントンを預かった下僕にこう言っているのです。「私が厳しい人であることを知っていたのなら、銀行へ預けておけばよかったのに。そうしておけば、私が戻った時には利息付きで返してもらえたのに」と。タラントンを活かして、さらに増やす。あるいは、そこまで活かさなくても、利息を増やして返す。主人は、タラントンという授かり物を活かさない、下僕の怠惰さを怒ったのです。この話は、貨幣のタラントンが現在使われる才能という言葉“タレント”の元になっていることがわかれば、さらに理解し易いでしょう。主人は、与えられた才能を活かさず、ただ大事に眠らせる、怠惰な下僕の行いを良しとしないのです。

さて、今日の聖書の言葉にあるように、私達はみんな「力と、愛と、そしてつつしみの心」を授けられています。「神様、なぜ私には苦しみがあるのですか」などと言わず、与えられた力と愛とつつしみの心を忘れずに、これに立ち向かっていきましょう。そして、どんなに難しくとも、預かった才能を、十分に活かすように、世の中に尽くしましょう。

冒頭に挙げた「ジェームス」は、ドクター・ジェームス・カーティス・ヘップバーン。ヘボン博士のことです。ドクターは遠い東アジアに行き、40年近くも滞在しました。すでに19世紀半ばにして、民族と国家をはるかに越えて、ここ日本で人々に奉仕したのです。そして、後世の私達一人一人に大きなタラントンを残しました。以来、明治学院は何万人もの若い人たちに、タラントンを授けて世に送り出しています。

諸君は今、ジェームスの残したタラントンを授かっているのです。このことを心にとめて、そして、ジェームスの永い冒険と同じように、民族や国家を超えて、才能を慎み深く、世に活かしてください。私の奨励

はいつも同じ結論になります。

明治学院に学ぶ若い君たちも、未来に向かって、民族と国家を超えて、何が本当に大切な、真剣に考えてください。

国際学部教授
11月5日奨励

答えはすべて与えられる

- 神さまはあなたを待っている -

高村 真代

《コリントの信徒への手紙 12章9節》

信仰って何ですか。そう聞かれると、クリスチャンならば「本当の神さまを信じること、イエスさまが十字架で死んで三日目に甦ったことを信じること、そして信頼することだよ。」などと答えると思います。ですが、神を信じていない人たちから見れば「この人たちは本当に神なんて信じているのか。」と疑ってしまうのが当然でしょう。ではどうして、神さまを信じているとクリスチャンは言うのでしょうか。

私は自分を振り返ってみて、信仰には「知ること」と「体験すること」が必要だと思いました。聖書を読んでみても、神を知って、そして体験して、信仰を持つ様子がたくさん書かれています。

まず、「知ること」です。神の存在を知らなければ信じようがないですし、また、どんな方なのかを知らなければ信じたくても不信感が湧いてきます。それを知るには聖書を読むのが一番です。でもそれだけでは足りません。聖書を読んで、ある人はよくできた物語だと言います。またある人は、全部読んだけれども心に響くものがない、と言います。読むだけでは神を信じることはできないのです。

そこで必要になるのが「体験すること」です。どんなに神がいないという人でも、神がいることを身をもって経験してしまえば、否定のしようがありません。隣に太郎君がいるのに「太郎君なんていません。」と言えますか。それと同じです。では、どうやって体験すればいいのでしょうか。神に会う秘訣として私に言えるのは、「神さま、あなたを体験したい」と神に祈り求めることです。

私は小学校一年生のときに神さまを知りました。中学生ぐらいから、神さまやイエスさまがいることは信じられる、でも信頼まではできない。こんな私は、まだ信じているといえないなあ・・・と悩んでいました。というのも、私はいろいろな経験から、愛することと信じること、この二つ

がまったく欠けている状態だったからです。人間という存在にも失望し、それを自覚していました。中学三年生から高校二年生頃は特に酷く、自分の存在価値が見えなくなっていました。私をこの世に繋いでいたのは、神さまの「自殺するな」という命令だけで、でもその神さまを信じきることもできなくて、じゃあ死ぬのかと言われてたら、いや待てよ、神さまは…。その繰り返しでした。死にたくても死ねない。唯一私にできたことは、祈ることでした。「神さま、あなたはいるのですか。そしてこの無意味な私は、この世界にいて良いのですか。死んだ方が世のためではないのですか。」そういう祈りをしばらく続けていたら、答えが与えられました。

『しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである。」と言われたのです。ですから、私はキリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。（コリントの信徒への手紙 12 章 9 節/新改訳）』

この時、こんな私でも生きていて良いということを知られました。むしろ無力なほうがいいんだなあと。それと同時に、神さまは答えてくれる。神さまはいるんだ！というのが実感できて嬉しかったです。聖書には「求めなさい、そうすれば与えられます」と書いてありますが、本当にその通りです。神さまは無返答じゃなくて、答えをくださる方なのです。私たちの不安とか、嫌な気持ちも、全部受け止めてくださるのです。

皆さんはもう神さまのことを知っています。後は体験するだけです。もし、神がいるのかと疑問に思っているのなら、今の境遇に不満ならば、どうして私はこんな風なのかと思うのなら、その思いを神さまにぶつけてみてください。そのときイエスの名によって祈ってください。神さまは必ず答えをくださいます。皆さんに神さまからの豊かな祝福がありますように。

社会学科 1 年
11 月 12 日 奨励

あの預言者も実はフツーの人だった

霜山 雅也

《列王記上 19 章 1 - 8 節》

皆さん、エリヤという人をご存知ですか。キリスト教科目の授業で聞いたことがあるかもしれませんね。彼は北イスラエル王国のアハブ王・アハズヤ王の時代（BC 850 年前後）に活躍した預言者で、イスラエルの神様 = 旧約聖書の神様を熱心に礼拝していました。

彼はアハブ王が信仰していたバアルの神様 シリア・パレスチナで礼拝されていた男の神様で、その宗教儀式では淫らなことをしたり、子供を犠牲にするなど不道德なものがあって、イスラエルの預言者たちから大変非難されたといわれています。 と対決し、バアルの預言者たちと、

まさに「祈りの真剣勝負」とでもいえるようなことをしたわけです。

どのようなことをしたかということ、カルメル山という山の上で牡牛を二頭用意させ、これを割いて一頭ずつ薪の上に乗せて火をつけずにおき、それぞれがそれぞれの神様の名前を呼んで、火をもって答える神様を本当の神様であるとしようということで、バアルの預言者 450 人を相手に祈りの勝負をしたわけです。結果、エリヤの祈りが聞かれて天から焔が降ってきてすべてを焼き尽くした、バアルの預言者たちはエリヤによって皆殺しにされてしまったということが列王記上 18 章に詳しく書かれています。

しかしエリヤはこの「祈りの戦い」で勝利を得たあと、ガックリ落込んでしまったのです。4 節「主よ、もう十分です。私の命を取ってください」と死を願うほどの落込みでした。これに対して神様はどうされたか。「お前は私の預言者だろう。甘ったれたことを言っていないでもっと働きなさい。私のためにやるのがたくさんあるのだから。」とはおっしゃいませんでした。5 節から 7 節に書かれているように、神様はエリヤをそっとしておかれた、そして十分な休息と食事をとることを許されたのです。

実は私は一昨年（2001年）の10月頃、鬱病という厄介な心の病気にかかりました。仕事に出ることができなくなってしまい、医師の指示で休まざるを得なくなってしまったのです。

先程、エリヤは死を願うほど深く落込んだと申し上げましたが、鬱病も実は、ある人にとっては死にたくってしまう病気で、鬱病が原因で自殺する人もいます。私は幸いにもそこまで至りませんでした。自分の身の置き所がないように感じることもあり、病気の身ながらも、ああこれが鬱病で死にたくなる気持ちなのだということがよくわかりました。

休み始めて二週間ほど経った頃でしょうか、心の中で休むことに対する後ろめたさというか、葛藤があり、家でゆっくり過ごしながらも心の中は悶々としていました。ちょうどその頃、ある書物を通して今日のテキストの聖書箇所へ導かれたわけです。そのとき感じたのは、「ああ、あの大預言者エリヤも自分と同じフツツの人間だった。心身ともに疲れ果てて落込んでしまっている。そして今の自分と同じように休んでいる、いや、神様から許されて休息を与えられている。神の使いは『先はまだ長い』』と言われた。自分も定年まであと十数年。先はまだ長い。今は休むことが許されているのだから、十分休ませてもらっているのだ。休んで英気を養うことが許されているのだ」ということでした。

エリヤに対しては、聖書に登場する大預言者ということで、それまではある種、畏敬の念というか憧れのような思いを抱いていたのですが、今日のテキストであるこの箇所に出会ってからは、同じ人間として深い共感を覚えています。

エリヤはこの後、聖なる山ホレブで神様から深い霊的な取扱い＝心の点検を受けて再び回復され、神様の御用を全うしました。私も病気を通して、神様から心の点検をしていただいたのだと思います。辛い出来事ではありましたが、これからの人生のために必要なことだったのだと、今は思います。エリヤにはとても及びませんが、同じように神様と人とのお役に立つものとさせていただきたいと願っています。

横浜就職部
12月1日奨励

マリア

大塩 光

《ルカによる福音書 1章 26 - 38節》

クリスマスの行事で世の中忙しいところです。多くの場合、クリスマスの意味を知らないか、知っていてもキリストの誕生日ということぐらいです。しかし正確には誕生をお祝いする日で、誕生日そのものではなく、いつ産まれたかは本当は分かりません。12月25日は元々はローマ帝国の冬至の祭りでしたが、最初の頃のキリスト教は、世の中にある様々な行事や習慣などを積極的に取り入れていって自分達のものとしていきました。

クリスマスとはクライスト・マス、つまりキリストのミサ、キリストを礼拝することを指します。キリストを礼拝することがクリスマスの意味ですから、私たちはクリスマス礼拝という特別な礼拝を守ります。美味しいもの食べたりするのもクリスマスの祝い方の一つかもしれませんが、イエスが神からこの世への最大のプレゼントであることを考えれば、プレゼントをしあうのも祝い方の一つでしょう。恋人など、大切な人と一緒に過ごすのも、イエスが愛そのものであったことを考えれば、相応しい祝い方なのかもしれません。教会の礼拝に来なければクリスマスは祝えないし喜べないということはないと思いますが、今日ここに来ている皆さんのような祝い方がより相応しいものなんだろうと思います。

全てとは言えませんが、今でもカトリックの中ではマリア信仰が根付いていますから、マリアはまさに恵まれた人間の代表のようなことがいわれます。今日の箇所を含め「すべて主のみ言葉の通りになりますように」という謙虚さの代表としてもマリアの名前は出てきます。マリアが生きていた時代、まさにローマの支配下にあったこともあり、世の中は闇のような出来事が沢山ありました。しかしマリア自身の置かれていた状況こそ闇だったのかもしれませんが、マリアは最初、天使から「おめでとう、恵まれた方」と言われた時に戸惑い取り乱しています。イエスを授かったことの知らせよりも前に、まず祝福の呼びかけに対して動揺す

るのです。マリアの姿勢にも見られるように彼女自身は謙虚な人で、自身でも「身分の低い」という言い方をしています。この身分の低いという言葉はギリシャ語では実際にさげすまれ、いやしめられている人をあらわす言葉で、マリアも実際に社会的にさげすまれたナザレという辺境の地で生活していたのです。

しかし、身分が低い所に追いやられている上に、何らかの形で結婚前に妊娠してしまったマリアにこそ神は臨んで、救い主の母としての重大な使命を与えたのだと思うのです。「お言葉どおりこの身になりますように」というマリアの言葉は、それに対するマリアのこのうえない喜びの言葉だったのではないのでしょうか。単なる喜びの美しい言葉ではないのです。壮絶な、実に凄まじい人生の荒波にさらされたマリアが、涙しながら本当の喜びを語ったのではないのでしょうか。

私たちは、救い主がクリスマスに貧しい家畜小屋で産まれたという、このルカによる福音書の箇所を読みます。そしてイエスは貧しい人の味方だと信じて、クリスマスの劇などで美しく演じます。しかし彼等はなぜ家畜小屋などでイエスを出産しなければならなかったのでしょうか。宿屋には彼等の泊まる場所がなかったからです。なぜ無かったのでしょうか。人口調査で人でごったがえしていて、単純に泊まる場所がなかったのでしょうか。今まで私たちはそう理解していました。しかしこのことについて、いつも私は不思議に思っていました。

そのわけはこうではなかったかと思うのです。ヨセフとマリアがヨセフの故郷であるベツレヘムに人口登録のために旅をして来たが宿屋がなかった、とあります。ベツレヘムはダビデの生まれた町で、ヨセフはその子孫ということになっています。だったら親戚が必ずいるはずだろうに、なぜヨセフはそこを訪ねなかったのでしょうか。訪ねてはみたけれど泊めてもらえなかったんじゃないかと思うのです。なぜならばマリアがいたからです。被差別地出身のマリアを連れていたから、ヨセフは親戚から毛嫌いされていたんじゃないだろうか、そう思うのです。

マリアは神の声を聞き、奇跡を信じて身をゆだね、闘いの道を歩みました。そう、マリアはまさに闘う人だったと思うのです。最初は神により神の子を授かりますが、まだヨセフと結婚しておらず、それは当時としては姦淫の罪と疑われてもしかたがないことで、そうなれば石を投げられて殺されてしまうのです。そのうえ人口調査のために臨月のマリア

は100キロ以上も旅をして夫ヨセフの故郷ベツレヘムに帰らなければならず、そのうえ帰っても泊まる場所がない。その後イエスが公の活動に出るまでは平和に暮らしたようですが、最後には自分の息子が目の前で十字架にかけられて殺されてしまう。こんな凄まじい人生があるでしょうか。彼女はまさに劇的な、そして闘い続ける人生を歩んだのです。

しかしマリアが苦しみだけで喜びがなかったかということ、それは違うと思います。神が自分に起こしてくれた数々の奇跡を思いめぐらし、自ら闘いの人生を受け入れた時の決断や、目の前で天に昇ろうとしている神の子キリストの前に足を向けた自分の姿を信じていたと思います。そしてそれがすべて神によって導かれていることを、イエス・キリストの叫びや血や涙と共に信じたと思います。そしてそんなマリアだからこそ神は選りとったのです。だからマリアは厳しい道だったかもしれないけれども、勇気をふるって踏み出し、そしてそれを喜びへと神が変えてくださることを信じて平安の中にあっただのではないかと思います。

マリアの言葉が今この世界に伝えられている意味は何でしょうか。マリアのように謙虚になりたいとか、皆から喜びの人だと言われるようになりたいとかいう憧れではないはずです。謙虚さや強さや勇気を持ちましようというような問いかけではないはずです。ましてや聖母マリアと言われるようにたてまつられることでもないと思います。

マリアは自分自身を通して神が為さった偉大な喜びの業を「心の底からの驚きと感動を持って受け止めていますか？」と、「神はこの世にあるすべての人を愛してやまない方なんだと言うことを素直に喜んでいますか？」と、そんな問いかけを今の私たちになしているように思えます。

クリスマスが近づいて来ています。マリアになされた神の偉大な業をもう一度新しく受け止め、私たちを創造して下さった神を誉めたたえるために讃美歌をうたい、そして私たち誰一人はずれることなくこの神の愛のもとにあることを喜びましょう。

マリアがそうしたように、私たちも神の子イエス・キリストの降誕を喜び祝いましょう。

一所懸命を心に刻む

脇田 良一

《マタイによる福音書 6章 25 - 32節》

「だから、言うておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか。あなたがたのうちだが、思ひ悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。なぜ、衣服のことで思ひ悩むのか。野の花がどのように育つのか、注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし、言うておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか、信仰の薄い者たちよ。だから、『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と云って、思ひ悩むな。それはみな、異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである。

先日、私は大手町から学校に急いで戻らなければならず、タクシーに乗りました。乗車してすぐに、運転手さんが興奮気味に話しかけてきました。抑えられない憤りを、誰かに聞いてもらわないではいられない、そのような様子でした。

「旦那、さっき会社を経営している社長さん風の、羽振りの良さそうな女の方を乗せたのですよ。」と切り出しました。

「そのお客さんが言ったんですよ。『人間なんて、生まれ育ったときから一生は定まっているのよ。人生を幸福に生きることができるか、不幸に

なるかは決まっているのよ。あがいてもどうしようもないことなのよ。』そう言ったんですよ。私は一生、家族もなくこうやってタクシーを運転して寂しく終わらなければならぬんですかね、旦那。戦争がいけないですよ。敗戦で故郷の樺太を着の身着のまま追われて、内地で頑張ったのだけれども、はい上がれなかった。さっきのお客さんみたいに言われちゃうと、私は何で生きているか分からなくなってしまう。がっくり来ますよ。悔しくもなるし、悲しくもなりますよ。生きているのが嫌になっちゃう。そうでしょ、旦那。」

私は、そう問いかけても、直ぐには答える言葉が思いつきませんでした。月並みに、「そんなに思ひ込まないで、人によって色々な考え方もあるからね。」としか答えられませんでした。この運転手さんの救いを求めるような言葉が、いつまでもいつまでも気になって頭から離れません。

話は変わりますが、私は鎌倉に住んでいます。宅地造成が進み、私の子供の頃に比べればずっと緑が減ってしまいましたが、まだまだ自然が残っています。夏には煩うくらいの「蝉時雨」です。蝉たちは、木々に留まり、「ミン・ミン」「ジジー・ジジー」「オーシンツクツク・オーシンツクツク」と、短い命の期間を精一杯に鳴きつづけます。子供の頃は蝉採りに興じましたが、この頃は蝉の一所懸命に鳴く姿に感動し、見とれてしまいます。

真夏に鎌倉の町を散歩すると、路傍のそこそこに、無心に生え、咲いている野の草、野の花に目がとまります。可憐さ、可愛らしさに心ひかれ摘み取って持ち帰り一輪挿しにそっと飾っておくことがあります。心豊かになります。野の花も、そして野の草も、一所懸命に無心に生きているのです。その無心に生きる姿に見入ってしまいます。

無心に鳴く蝉、無心に咲く野の花、無心に生える野の草を、大自然の営みに抱擁し生命を与えた想像もできない大いなる力に感動しないではいられません。

我々の人生に思いを致すとき、やはり与えられた命を無心に、精一杯に、一所懸命に生きることにこそ意義があるのではないのでしょうか。人それぞれの生き方においてどれが価値がありどれが価値がないということはありません。

「一所懸命」という語句を私自身はいつも心に刻んでいます。「一生懸

命」ではなく「一所懸命」です。この語句に敢えてこだわりたい。「一生」とは、生まれてから死ぬまでの全時期の意味です。そうではなく、「昔、武士がただ一か所の領地を死守して生活の頼りとした」という意味での「一所懸命」です。「自らの心の声を、大いなる力の命じる所と信じ、誠実に、精一杯に全うするように務めること」であると思います。

とはいえ、人生にはいつも起伏があります。私自身でも、思い返せば自身の病気、家族の介護、家業の破綻など、やはり多くのことに時間を割かれました。順調にいかない、歩みを阻む障害が多々ありました。隣家より出火した火災の貫い火で、私にとっては大切な試験に遅刻し、再度の受験を余儀なくされたこともありました。ですから、これからもどんな障害があるか分かりません。そのために極めて厳しい生活環境に見舞われるかもしれません。とても不安です。このような経験から私は、今の生活はまた明日も明後日もあるのだと楽観的に考えられない習性が身についてしまいました。勉強するときも、仕事をするときも、遊び楽しむときも、今が最後かもしれない、そう思う習性が身についてしまいました。三十代の前半に患った網膜剥離により、両眼失明の恐怖からの逃避、いつ中断されるか、挫折することになるか分からない。その恐怖から逃れるためにがむしゃらに仕事をした時期がありました。

「あなたがたのうちだれが、思い悩んだからといって、寿命をわずかでものばすことができようか。」。私自身に強烈に反省を強いた指針でした。与えられた境遇で、自分の命を迷うことなく励む。私はこれからも、自らに与えられたと信じる道を「一所懸命」に歩むのみです。それが人生という尊い賜物を与えられた者の義務であると思います。

前学長

12月17日奨励